

# 愛と苦しみ

人間の癒しの源であるキリストの受難と復活

ボグスワフ・ノヴァク（神言会司祭）



# 目次

## 導入

### 人生における愛

愛の体験

愛に伴う苦しみの問題

偽りの愛

イエスが下さる希望

### 最後まで愛することは可能でしようか

イエスの使命

苦しみや死より強い愛

ゲツセマネの園での苦しみ

不正な裁判

十字架に付けられた愛

### どうしてイエスは最後まで愛することができたのでしょうか

イエスの発達

イエスの洗礼

イエスが使命を受け入れて、それを果たし始める

イエスの使命と彼の本性が公に現される

イエスの自己認識と自己同一性（アイデンティティ）の発達

イエスの父と神の国

どうして、こんなに多くの人々が、最後まで愛していないのでしょうか

人間の愛する能力

神から出る愛に生きる

人を神から遠ざける信仰

人間が神の愛を見出せない理由

## 神の愛の啓示

神の姿であるイエス・キリスト  
ゲツセマネの園誠実な神の苦しみ

人間によって裁かれる神

ヨブの裁きに対する神の反応

神の無罪の証拠である神の愛

傷つけられた神の愛

なぜ神がご自分の苦しみを表してくださつたのでしょうか  
和解への招き  
復活悪と死より強い神の啓示

## 人間の癒し

最大の贈り物

世の罪を取り除く神の小羊

新しい永遠の契約

十字架から注がれる癒し

イエスを知ること

## 愛の完成へのペトロの道

イエスとの出会い

信仰の成長

ペトロの愛の告白と裏切り

愛の完成

## エピローグ・全てのものに優る愛



## 導入

人生において最も大切なことは愛であると思っている人もいれば、愛について全然考  
えてみたこともない人もいるようですが、色々な人の生き方を見て簡単に分かるように、  
一人ひとりが、はつきりと意識していくともあまり意識していなくとも、必ず愛を求め愛  
を追求しています。それにもかかわらず、外ならぬ愛を見つけるに至る人が少ないし、  
ましてや実際に愛に生きている人がもつと少ないという事実を、人間によつて作られた  
世界の現状がはつきりと示していると思います。どうしてこのようなことになつている  
のでしょうか。私たちはどこで愛を見つけることができるのでしょうか。出会つた愛に  
忠実に生き、最後までこの愛にとどまり、その完成に達するためには、一体どうすれば  
良いのでしょうか。

イエス・キリストは、私たち一人ひとりが心の奥深いところで求めている愛に、完全  
に生きた人です。イエスは真の愛に生きただけではなく、この愛への道を示した上に、  
この愛に生きるために必要な力を与えることのできる方なのです。恐らく、それが可笑

しいと思う人もいるかもしれません、この愛の道を知るために、また、このイエスが与える力を受け入れるために必要なのは、正に十字架に付けられているキリストを見つめることなのです。キリストの十字架は、今でもある人にとってつまづきの源であり、別の人にとっては気にするほどの価値もない愚かなものであります。けれども、その神秘を知るようになる人にとっては、キリストの十字架は愛に生きることを可能にする、本当の知恵と力の源なのです。

キリストにおいて実現された啓示を見る前に、愛を求めている多くの人が実際に暮らしている状況について考えてみたいと思います。なぜなら、自分の置かれている現状が分かつた上であれば、キリストが教えてくださったことが一層分かりやすくなるし、キリストの教えを自分の人生の体験に当てはめることができると思うからです。

# 人生における愛

## 愛の体験

人間は人生に関する様々な真実を、他の人から学ぶことができます。けれども、自身で体験しなければ、いくら教えられても理解できないこともあります。そのうちの一つが、愛なのです。すなわち、私たちは愛を体験したことがなければ、誰かが一生懸命に愛について説明したとしても、それがどんなことであるのか、なかなか分からぬということなのです。他方で、愛を体験している人には、今体験しているのは、心の中で求めている愛であるということが、直感的に分かります。愛は人間の心を他者に開き、その人を他者と繋げます。従つて、愛はこの人を自己中心的で、非常に狭い世界から引っぱり出し、今まで見ることのできなかつた人生の素晴らしい可能性を、当人に現します。愛している人は、この愛によつて色々な恐れから解放されて新しい自由を与えられるし、大きな希望と喜びで満たされることになります。この体験こそ本物の幸福であり、

人間の本質、つまり人間らしく生きるために不可欠なものであるということが、この人には分かることになるのです。

愛を知らない人や、愛の体験を忘れた人でさえ、愛こそが人生において特別な事柄であると認めるはずです。まず、愛は子どもが健全に成長するために、何よりも必要としているものです。子どもにとって、例えば健康や食糧など重要なものが足りなくて、自分の両親が互いに愛し合い、自分自身も愛されていることを子どもが実感しているならば、その子どもは立派な人間に育つ可能性が非常に高いと言えます。けれども、子どもは、生きるために必要なものすべてが与えられても、愛されていなければ、必ず色々な精神的な悩みを抱きますし、自分自身の価値さえ知ることができないでしょう。それゆえに、自尊心をもつことや、自分自身や他の人を愛することが、とても難しくなります。結果的に、人間として正しく成長することができない恐れ、場合によつては、生きるために必要な力さえもない恐れもあるわけです。愛は子どものときだけではなく、人生の他の時期においても、非常に重要で特別な役割を果たしています。実際に愛している若者や、いつか必ず永遠に続く本物の愛に出会えるだろうという希望を抱いている若

者は、どれほど大きな喜びや熱意に満たされ、どれほど輝き、どれほど一生懸命に生きていることでしょうか。愛を体験している人からは、どれほど素晴らしい優しさと温かさが流れ出ていることでしょうか。愛によつて人間は、どれほど美しく、どれほど立派になつていることでしょうか。自己中心的に生きてきた老人と、愛に満たされて他の人のために生きてきた老人を比較すれば、人生における愛の大切さを、なおさら強く自覚することができるのではないかと思います。

## 愛に伴う苦しみの問題

その自覚のあるなしは別として、すべての人々が愛を最高の幸福として体験していると思います。実は、愛は人間の最も根本的な必要性を満たし、完全な幸福を与えることのできる唯一のものですから、愛は私たちの最も深い最も強い欲求となるのです。しかし、この欲求は大きな問題と繋がっています。誰かを愛したことのある人なら、その問

題をよく知っているはずですし、最後まで愛に留まることが、どれほど難しいかということも分かっているはずです。

もし、あなたが愛を大きな幸福として体験したことがあるとするとならば、このような状態がいつまで続いたかを思い出してみてください。もしかして、あなたの愛が大きな喜びや幸福感をもたらすと同時に、あなたが今まで知らなかつた苦しみの源にもなつているということに気がついたかも知れません。すると、そのときから、この愛を疑いはじめたのではないでしようか。そして、あなたがこの愛から得るものと、この愛について失うものを比較するようになつて、望ましくない結果から自分を防衛することを選んだとするならば、そのときから、この愛が弱くなつて、それに伴う幸福感も少しづつ消えていったのではないでしようか。

愛している人々だけではなく、愛していない人々も苦しんでいますが、誰かを愛している人は、誰も愛していない人よりも傷つきやすいのです。それは、この人が愛することによつて他人と深くて固い縁を結び、今まで関係のなかつたことに関わるようになり、以前苦しみの原因にならなかつた体験が、新たな苦しみをもたらすことがあるからです。

このことを理解するために、例えば、他人の苦しみに対する自分の態度について考えてみてください。自分が愛していない、自分と全く関係がないと思う人の苦しみに關しては、無関心であるか、ある程度まで関心をもつて、この人が可愛そだと思うことがあつたとしても、この人の苦しみが、自分の苦しみになることはないのではないでしようか。けれども、自分が愛している人が同じように苦しむと、この苦しみは自分の苦しみになるでしよう。場合によつては、愛している人の苦しむ姿、例えば病気で苦しんでいる姿を見るよりも、代わりに自分が病気になつた方が耐えやすいものです。もう一つの例は、他の人の振る舞いに対する私たちの反応です。他人が私たちを無視したり、失礼なことをしたりするとき、私たちの反応は、この人とどんな関係をもつてゐるかによつて変わるでしよう。私たちが左程尊敬しない人や、関わらなくてもいいと思うような人でしたら、この人に對して怒つたとしても、苦しむほどには気にしないですむはずです。けれども、同じことを愛している人にされたら、私たちは深く傷つけられて、その愛が大きければ大きいほど、私たちの苦しみも大きなものになるのです。

私たちが誰かを愛するようになつたら、この人からも愛されたいと思うでしようし、

いつもこの人と一緒にいて、益々深い交わりをもつて絆を固め、一つになりたいというような望みを抱くようにもなるでしょう。要するに誰かを愛するようになった人は、今までもつていなかつたような望みや期待をもつようになるということです。けれども、不完全な自分が不完全な相手と接する中で、両者に悪意がなくとも、勘違いや誤解、までは、失望や期待はずれなどのような、苦しい体験は避けられないものなのです。そのような体験によつて、相手が自分とどれほど違つているか、相互の愛に対するこの人の期待や望みが、自分の期待や望みとどれほど異なつてゐるかということ、また必ずしも自分が相手のすべての期待や望みに応えることができるわけでもないし、相手も自分のすべての望みや期待に応えることができるわけでもないということを自覚すればするほど、今まで知らなかつたような苦しみが益々大きくなるわけです。

私たちは愛を最も大きな幸福として体験して、それを何よりも強く求めます。しかしながら、この愛は、私たちにとつていつまでも大きな神秘であります。なぜなら、愛は私たちの存在の最も深いところに触れるものであるし、私たちの振る舞いや私たちの価値観、最終的には私たち自身さえも変えてしまうからです。同時にこの愛は、と

ても複雑で多くの矛盾に満ちているように見えて、私たちをどのように、またはどこへ導こうとしているかが分からなくなることもあるからです。また愛は人間を大きな希望や喜びで満たしながらも、慣れてきた生き方を変えさせることによって今までの安定を壊してしまうからです。従つて、愛は悲しみや不安の原因にもなるわけです。力の源となり人を強くする愛が、同時に人間を弱めて無力にします。自由と生きがいを与える豊かにするその愛が、また同時に、他人と結び付けて、他人に対する新しい責任を与えることによつて、私たちの自立を制限するし、自分の欲望や野心を押さえることも要求し、場合によつては、大きな犠牲を払うことや自分の命をささげることにまで導きます。要するに、愛は私たちの最も深い望みを満たすと同時に、私たちが本能的に避けたいと思う体験にまで導いてしまいます。幸福の源でありながらも、愛には苦しみが伴います。愛はその魅力によつて私たちを引き寄せながら、恐れや不安をもたらすことによつて、私たちをその魅力から突き放すかのようを感じせるものもあるわけです。

度々人々は愛によつてだまされたと考へてしまします。なぜなら、時間がたてばたつほどこの愛は人々が最初に考へていたものと、全く違うものであるということが明らか

になるからです。愛のすべての結果を受け入れる覚悟をもっている人は、どれくらいいるのでしょうか。愛の道を最後まで歩むために必要な勇気と力をもつてている人は、どれくらいいるのでしょうか。愛に生きるために必要な力をもつていないと思う人が非常に多いようです。いわんや、このような愛に生きることは、まったく不可能であると結論を出す人も少なくないようです。最終的に、多くの人々が、愛に伴う苦しみを避けてしまったために、愛はどのようなものであるのか、そして、どこへ導くものであるのかということが分かるようになる前に、残念なことに愛をあきらめてしまうのです。

## 偽りの愛

愛をあきらめれば、愛の欲求もなくなると思うのは大間違いです。この欲求は、私たちの中に非常に深く根ざしているので、いくら努力してもそれを取り除くことはできないのです。愛をあきらめてからも残るこの愛の欲求と、私たちはどう向き合っているの

でしょうか。

多くの人は、眞の愛の欲求を偽りの愛で満たそうとしています。この偽りの愛とは、相手の善を目的とするのではなく自分の欲求を満たすことによって、本当の愛に伴うような気持ちを得ること、要するに、愉快で望ましい感覺や感情を得ることを主な目的とする他者との関係、もしくは人間以外の生き物や何かの組織または何らかの物との関係です。愉快で望ましい感覺や感情を味わうことによって、人は自分の愛の欲求が満たされているかのような気持ちになりますが、偽りの愛は、この欲求を本当に満たすことができないばかりか、かくて加えて大きな問題を引き起すのです。

眞の愛に伴う苦しみを避けるために愛をあきらめた人は、自己防衛的な態度をとつて心を開かず、偽りの愛の対象となつている人とあまり深い関係を結ばないように、要するに、この人間関係において自らのコントロールを失わないように注意を払います。そのようにしている限り、自分の自立が保たれ、自分を守るために築いた「壁」の外に出る必要も、他者に対する責任をとる必要もなく、自分が苦しむ危険性を避けることができると確信しています。この人は自分の欲求を満たすために、仕事として偽りの愛を売

る人のサービスを、つまり、無条件で眞の愛の欲求が満たされているかのような気持ちを与える人のサービスを受けるか、自分がそのために利用することができると思うような人を探します。自分の欲求を満たすことのできるsuchな人を見つけたら、この人を自分の中にしようとなります。そのためには、自分の有利なところ、例えば、経済力や社会的な地位を用いることがあります。それから、自分がこの人に恋に落ちたふりをして、この人を自分の勝手な「愛」によつて攻撃することもあります。その場合、この人の必要や欲求や欲望を満たすように、一生懸命に努力しますが、当然ながら、この人のことを大事に思い、この人の善を求めてそうするのではなく、この人を自分に依存させるためなのです。このような振る舞いは、麻薬の売人の振る舞いによく似ています。麻薬の売人は、最初は友達のふりをして、悩んでいる人を本当に助けたいかのように、とても安い値段で麻薬を売るか、場合によつては、無料であげることもあります。多くの場合、偽りの愛の対象になるのは、精神的に弱い人や、自分自身を掛け替えの無い存在であると思わぬ、誰かに愛されるには相応しくないと思つてしまふ人なのです。初め、この人は、愛しているかのように振る舞つている人の行いを余計なお世話や迷惑と思つて、相

手の誠実さを疑つて警戒し、相手の振る舞いを拒否しているでしょう。しかし、自分の欲求や欲望を満たすことによつて自分を気持ち良くさせる相手の行いを、少しぐらい樂しんでもいいと思つて、それを受け入れることにしたならば、この快樂の状態に少しづつ慣れてきて、このような「愛」の行いを段々と強く求めるようになります。結果的に、自分をそんなに「愛」してくれている人との出会いを大きな幸福として考へるようになり、この「愛」に夢中になつて、この人が目指している本当の目的を見分けることができなくなり、この人との関係に、より簡単に巻き込まれてしまうわけです。愛のふりをしている人は目指した目標に達した後に、麻薬の売人が人を麻薬に依存させてからこの人に対して態度を変えるように、偽りの愛の対象となつている人に対して自分の態度を変えます。この人のことを大事にしているふりをするのをやめて、自分の本当の関心を表します。要するに、自分自身の欲求や欲望を満たすことが、何よりも、誰よりも大事であるということなのです。そして、自分の犠牲となつた人を、できる限り自分のために利用するようになるわけです。

眞の愛への望みを偽りの愛で満たそうとする人は、偽りの愛から最初に大きな満足感

を得て、大きな喜びを感じるので、自分がやつと正しい道を歩み始めたと確信することがあるでしょう。そのとき、偽りの愛は人間の問題の理想的な解決に見えるかも知れませんが、実は、かえってそれは本当の困難の始まりでしかないので。眞の愛を求めている人間の本性を、そんなに簡単にだますことができるわけがありません。偽りの愛は、眞の愛の欲求を満たすのではなく、ただこの望みが満たされているような感覚を与えるだけです。そのような状態は、単なる幻想にすぎないものなのです。それゆえに、偽りの愛を選ぶことは、偽りの幸福を選ぶこと、つまり、しばらくの間しか続かない満足感や、非常に壊れやすい表面的な幸福感を選ぶことなのです。つかのまで、かつ、もろいというのは、この満足感や幸福感は周りの状況にかかるているもので、この状態が変わつたら、偽りの愛が与えた満足感や幸福感が消えてしまうからです。そのために、以前と同じように、愛の欲求が満たされているような感覚を得るためには、前よりも強い刺激、つまり、前よりも激しく熱情的な「愛」が必要になります。従つて、偽り

の愛に生きる人自身は、このような生き方に、または自分を偽りの愛の対象としている人に依存するようになり、自分の行動を制し切れなくなる可能性があるわけです。

偽りの愛に生きる人は、のような生き方に依存するようになつたら、それまで大事にしてきたはずの自立を失い、管理者や支配者から奴隸の身に変わります。偽りの愛の、いわば加害者と被害者の、二人の関係が相互依存になつたら、あらゆる依存と同じように、二人にとつても周りにいる人々にとつても、その関係は有害なものになります。この関係は一見、相互の愛に見えて、実際に偽りの愛であるということを表す幾つかの特徴をもっています。まず、二人とも、相手に対して非現実な期待をもつていて、自分が幸福になるかどうかは相手にかかるつているのだと思つたり、相手無しには生きることができないと考えたりしています。それから、自分の期待を満たすために相手を支配しようとしたり、操作しようとしたりしますので、自分の期待が満たされないと、相手に対して大きな怒りを感じたり復讐心に燃えたりします。二人とも、基本的に相手を利用して自分自身の欲求や欲望だけを満たしたいと思うので、二人の関係は条件付のものとなっています。この条件というのは、例えば、「あなたが私の欲求や欲望を満た

してくれる限り、「あなたと付き合ってあげる」というものであったり、「あなたが私に忠実であるならば、私もあなたに忠実を尽くす」というようなものであったりするのです。そのような条件のため、この関係には信頼や自由が欠けていて、相手に裏切られるのではないか、または、見捨てられるのではないかという恐れや心配が常に伴います。二人とも、相手を自由な人間としてではなく、自分の所有物であるかのように扱うので、相手を尊敬することができないし、自分自身をも尊敬することができません。二人とも自分の心を開くことはないし、この関係に関して自分が感じていることや考へていてることについて、相手に話したくないと思つてゐるのです。この関係は、偽りの愛に特徴的な以上のような害を二人に与えるものでありながらも、それを改善するためには何もせず、まるで何の問題もないかのように、また、そのようなものでしか有り得ないかのように、それをそのままにしておくのです。

要するに、偽りの愛に生きることは、基本的に自己中心的に生きることなのです。そんな生活を送つてゐる人は、益々自分の心を閉ざして他の人から離れていきます。従つて、この人にとって真の愛に基づく関係を結ぶことは段々と難しくなります。結果的に、

他の人を傷つけたり滅ぼしたりするだけではなく、段々と非人間的になつて、ひいては自分自身をも滅ぼします。

以上に述べたことをまとめてみると、眞の愛の欲求を偽りの愛で満たそうとする人は、当初は成功するように見えて、結果的に、以前、眞の愛をあきらめた時よりも不幸になつてしまつますので、このような試みは、愛に苦しみが伴うという問題の解決ではありませんし、眞の愛や眞の幸福に達する希望も与えることができないと言えると思います。従つて、このように生きようとしている人は、絶望的な状態、つまり眞の愛や眞の幸せを手に入れる可能性のない状態にあるということになります。

当然のことながら、自分が絶望的な状態にあるということを認めるのは簡単ではありません。実際に、そのような状態にある人はこの事実をなかなか認めようとしません。考えてみれば、人間は愛がなくとも、幸福がなくとも生きることはできますが、いつか眞の愛と眞の幸福を手に入れるだろうという希望がなければ、生きることはできません。なぜなら、希望を失うことは、生きる意義や生きるために必要な力を失うことであるからです。希望は、小さくとも、言つてみれば偽りのものであつても、人間はそれをどう

しても必要としています。ですから、どんな方法によつてもそれを得ようとしますし、また真の希望を見出しができなければ、抱いている偽りの希望を保つために、自分自身を騙すこととも現実から逃避することもあります。けれども、人間を生かし、眞の愛や眞の幸福に導くことのできるのは、眞実と現実に基づく確かな希望だけなのです。

## イエスが下せる希望

およそ 2000 年前に生まれたイエス・キリストは、私たち皆が心の奥底で求めているような人生、つまり愛に基づく人生を完全に生きた人なのです。イエスは、愛に生きる人生のすばらしさとその魅力を示したと同時に、愛の源、または、愛に伴う苦しみを受け入れる勇気と、この苦しみに打ち勝つ力の源を、私たちに示してくださいました。イエス・キリストは、私たちに確かに眞実である希望を与えたといし、私たちを愛の完成に導きたいと望んでおられます。

イエス・キリストが与えてくださる希望と愛は偉大な神秘ですので、それを完全に理解することも完全に説明することも不可能です。けれども、必ずしも完全な理解や説明は必要ではありません。私たちに必要とされているのは、この偉大な神秘を体験すること、要するに、イエス・キリスト本人と出会うことなのです。この出会いは、聖パウロが体験したように、突然に、全然期待や予想もしていない時に起ころかかもしれませんので、大事なのは真理を求め、それを追求することによって、この出会いのために準備することなのです。真理を探し求める方法は色々あるでしょうが、もつとも確実な方法とは、神が私たち一人ひとりに送ってくださる聖書の言葉を読んで、それを黙想し、それに基づいて神ご自身と対話することなのです。

この小冊子の中で紹介される神のことばとそれに続く短い解説は、イエス・キリストが私たちに与えようとしておられる希望と愛を知るために、少しでも助けになれば幸いと思って執筆されたものです。この小冊子が、真理であり希望であり愛である方、また、私たちの完全な癒しの源である方、外ならぬイエス・キリストその人との、皆様の出会いのための準備の一助となりますように、お祈り申し上げたいと思います。

## 最後まで愛する」とは可能でしょうか

色々な人々の生き方、特に自分自身が生きて行く上で戦いを見れば、果たして人間は真の愛に生きる可能性をもつてているのだろうかと、疑うようになつても不思議ではないと思います。このような疑問を抱くのは、当然であるとさえ言えるかもしません。このような疑問を意識しながら、イエス・キリストの姿を見つめてみて、人間が最後まで愛することが可能であるかどうかという問い合わせに関して、イエスが自分自身の生き方をとおして与えてくださった答えを見出してみたいたいと思います。

## イエスの使命

「わたしが天から降つて来たのは、自分の意志を行うためではなく、わたしをお遣わしになつた方の御心を行うためである。」ヨハ6,38

ピラトの前で裁判を受けたとき、イエスの運命、つまり、イエスは生きるか死ぬかといふことが決まるとき、イエスは真理について証しをするために生まれたと宣言しました。イエスは、何かの抽象的な真理とか、哲学的な真理や科学的な真理について語ったではありません。イエスが語つたのは、私たちが人間らしく生きるために知らなければならぬ真理なのです。それは、神についての真理であると同時に、人間についての真理なのです。イエスは神のみ旨を忠実に行うことによつて、この真理を示してくださいましたのです。

イエスは、完全に神の望みに従つて生きていたために、完全な人間、つまり創造主である神が目指したような人間となりました。それゆえにイエスは自分の姿、自分の生き方によつて、私たち一人ひとりについての神の望みを現したわけです。イエスを見つめてみると、人間は愛によつて、また愛のために創造されている存在であつて、愛こそが私たちの本質であるということが分かります。そして、愛に生きることによつてのみ、人間は完成されるし、人生の目的に達することができるということも分かるのです。

イエスの使命というのは、人間についての真理を現すことだけではなく、人間の本質に沿つて生きる可能性を私たちに与えることでもありました。その使命を果たすために、イエスはまず、愛に生きることは人間の努力の結果ではなく、神がすべての人々に与えたいと望んでおられる賜物を人間が受け入れた結果であるので、愛に生きることは、すべての人々にとって可能なものであるということを教えています。要するに、愛に生きるために私たちは、今までよりも力を尽くして努力しなければならないということではなく、神を信頼して、心を開いてその賜物を受け入れて、この賜物に忠実に生きることだけで十分であるということなのです。それからイエスは、神が私たちに与えたい愛とは、どのようなものであるのか、この愛に生きるとは、どのようなものであるのかということを示してくださいます。さらに、私たちはどんな状況においても、神から受けた賜物に忠実に生きることができるという事実を表すことによって、イエスが私たちに勇気を与えてくださるのであります。

参照：ヨハ 18,33-40；マタ 9,9-13

「人の子が来て、飲み食いすると、『見ろ、大食漢で大酒飲みだ。徴税人や罪人の仲間だ』と言う。しかし、知恵の正しさは、その働きによつて証明される。」マタ 11,16

イエスは全ての人を無条件に愛して、全ての人々の完全な幸福を求めました。従つて、出会つた人々に必要な助けを与え、彼らのために真の善を行うことによつて、彼らに奉仕していました。出会つた人々の必要性に応じて、イエスは教えたり、癒したり、悪霊や罪の支配下から開放したり、慰めたり、希望や平和を与えたりしました。このような助けそのものが、目的であつたわけではありません。この助けは、必要性の海の中の一滴の水にすぎないものであり、この人たちの問題の決定的な解決にならないということを、イエスが誰よりもよく知つていました。人を助けることによつて、イエスは何よりも神の愛を現わし、人々に神によつて愛されているという実感を持たせようとしたのです。なぜなら、人間が神を信頼して、神に自分の人生を委ねて初めて、その人は神が与

えたい賜物を受け入れ、その賜物がその人の中で成長することによって、本当に幸せになると確信していたからです。

イエスは特に、愛を知らないせいで罪の暗闇に生きていた人々、自分のことばかり心配して、自分のためにだけ利益を求めていた人々と共にいました。それはイエス自身が、「罪びとの仲間」と言われたほどひんぱんにしていました。けれども、このように言われ侮辱されても、イエスは自分の態度を変えることなく、「正しい人」の怒りを浴びながら、罪に定められて軽蔑されていた人々のところにとどまつたのです。それを見ると、イエスにとつては、自分の評判や権力者と仲良くすることよりも、神から与えられた使命を果たすこと、つまり、神の愛を知らない人に、神の愛を伝えることが大切であったということが分かります。

## 苦しみや死より強い愛

## ゲツセマネの園での苦しみ

「さて、過越祭の前のことである。イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた。」ヨハ 13.1

イエスは、大勢の罪人と交際して神の愛を伝えようとしたとき、多くの苦しみを体験しました。なかなか理解されなかつたり、あるいは、完全に誤解されたりしたとき、悪口を言われたりあざ笑われたりしたとき、または、受け入れられなかつたときや裏切られたとき、友や敵がイエスを利用しようとしたときに、イエスは苦しんだに違いないと思います。実際にイエスを殺そとまでした人もいましたが、色々な苦しみや命の危険に直面しても、イエスはひたすら神のことを教え続け、神の愛を現しつづけたのです。

イエスの教えを注意深く聞いたユダヤ教の指導者たちは、度々イエスを批判したり攻撃したりしましたが、イエスはこのチャレンジを受けて、彼らに反論する機会として利用しました。イエスは公の議論によって、自分の方が聖書の専門家やファリサイ派の人たちよりも、聖書の中に書き記されている神の望みをよく知っているということを示し

ました。それを見た多くの人々がイエスをメシアとして認め、イエスに従う群衆は益々増えていきました。イエスの場合と逆に、国民に対する影響力を段々と失い、自分たちの名譽や威信が傷つけられたと感じた指導者たちは、イエスのことを益々激しく恨み、イエスに対して段々と強い敵対心をもつようになっていきました。イエスは指導者たちのこののような態度の変化を見て、彼らが妬みや競争心や虚栄心に支配されて、自分たちの権威や社会的な地位、またそれに基づく自分たちの特権や利益を守るために何をしようとしているのかを、より簡単に予想することができたはずです。そして、ゲツセマネの園で祈つたとき、今まで体験した苦しみよりも大きく恐ろしい苦しみが、自分に差し迫つている」とをはつきりと直感したのです。

参考：マタ 16,21-23; 26,36-38; マニ 3,1-6

「少し進んで行つて、うつ伏せになり、祈つて言われた。『父よ、できることなら、この杯を私から過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願

いじおりではなく、御心のままに。』 マタ 26,39

イエスは、自分に大きな苦しみを負わせた人や自分を滅ぼそうとした人まで含めた、すべての人々に対する愛に満たされていました。けれども、正常な人なら誰でも同じように、自分を憎む人と出会うことは恐っていましたし、自分に対して敵意をもつ人々からその敵意を行動に表されることを考えると、心が心配と悲しみに満ちたことでしょう。ゲツセマネの園にいたとき、この恐れと悲しみは、弟子たちの前に隠せないほど大きくなっていました。それはイエスが弟子たちの支えを願ったほどの、非常に辛い瞬間でした。この恐れと悲しみを抱いたイエスにとつて神のみ旨に従うことは、今までよりもはるかに難しいものになっていたのではないかと思います。

人間が自分の苦しみの意義を理解すること、例えば、自分の苦しみから生まれてくる善を見出すことは、この苦しみを受け入れるための大きな力になります。イエスは宣教活動をされている最中に、色々な苦しみと出遭いましたが、病人を癒したり、空腹の人を食べさせたり、絶望に陥った人に希望を与えたり、悲しんでいた人を慰めたりするこ

とができました。要するに、この活動は多くの実を結んでいたので、宣教活動中の苦しみは、大きな妨げにならなかつただけではなく、もしかして、この働きを促す力になつていたのかもしません。けれども、イエスを殺さなければならぬと考へたほどイエスを憎んでいた人々の手に、自分自身を引き渡すことから、どんな善が生まれてくるのでしょうか。もしかして、それよりも、この人々から逃げて自分の命を救つて、自分の助けを必要としている人、この助けを喜んで受け入れる人のところに行つた方が良いのではないでしようか。自分が死ぬよりも、この人たちのために生きた方が、より大きな善につながるのではないでしようか。人々のために働くようになつてから1年しかたつていない今、特に、イエスの助けを求めて、イエスのところに益々多くの人々が来るようになつっていた今、死ぬことにどんな意味があるのでしようか。

このような人間的で常識的な考え方が、イエスにとつて大きな誘惑となつていたということは、確かなことではありませんが、その可能性が非常に高いのではないかと思ひます。おそらく、砂漠でイエスを誘惑したサタン、そして時が来るまで、つまりこの決定的な瞬間までイエスから離れていたサタンは、今こそ全力を込めてイエスを攻撃した

ことでしょう。もしかして、ご自分を罪人の手に引き渡すことが無意味であると説得することによつて、嘘の父は救いの道を歩んでいたイエスを妨げようと、できれば、この道からイエスを引き離そうとしたのではないかと思います。

サタンすなわち悪魔の誘惑によつて強められた恐れは、確かに非常に大きかつたでしょう。けれども、この恐れはイエスを麻痺状態に落とすことや、敵から逃げさせることができませんでした。イエスにとつてこの恐れ、また他の苦しみを避けたいという望みは、非常に強くても、絶対的なものではありませんでした。イエスは神を愛していたゆえに、自分の恐れや欲求よりも神を信頼していました。自分の本能や常識に従うよりも、神に従いたいと心から望まれたのです。イエスにとつて最も重要なこととは、苦しみを避けることや自分の命を救うことではなく、神である父から与えられた使命を果たすこと、つまり例外なくすべての人々を愛することによつて、神と人間についての真理を現し、すべての人々を神との和解に導くことでした。誰よりも、何よりも父である神を愛し、神を信頼していたイエスは、この愛のすべての結果を受け入れる覚悟を固めていました。と同時に、誰よりも力強くイエスに敵対して、抵抗していたゆえに、誰よりも神

の愛を知る」とを必要としていた人々の前で、神の無条件の愛を証しする重要性をよく知っていたイエスは、「どんなことがあっても」の使命を果たす覚悟をも固めていたのです。ですから、この人たちの手から来る苦しみの激しさが分かっていても、近づく反対者から逃げるのではなく、むしろイエスは彼らを迎えて、自分自身を彼らの手に引き渡したわけです。

## 不正な裁判

「わたしたちが語るのは、隠されていた、神秘としての神の知恵であり、神がわたしたちに栄光を与えるために、世界の始まる前から定めておられたものです。この世の支配者たちはだれ一人、この知恵を理解しませんでした。もし理解していたら、栄光の主を十字架につければしなかつたでしょう。」 1コリ 2,7-8

参照：マタ 26,40-50

イエスが十字架上で亡くなつたのは、父である神の救いの計画の一部であつた、つまりこの死は神の望みに適うものであつたと、いうような考え方を時々聞きます。けれども、イスラエルの支配者たちがイエスを殺したのは、神の知恵を理解できず、その計画に逆らつたためであつたということを、もうすでに聖パウロが教えてています。それゆえに、イエスの十字架上の死は、預言者によつて予言されたものであつても、神の望みに適うものであるどころか、むしろ神の望みに逆らつるもので、人間の罪であつたと、いうことが言われなければならぬのです。

参考：　四へ1,9-11；3,19-21；8,21-30

「わたしがつかわす者を受けいれる者は、わたしを受けいれるのである。わたしを受けいれる者は、わたしをつかわされたかたを、受けいれるのである。」　四へ3,20

イエスが語った「ぶどう園と農夫」のたとえ（マコ 12,1-11）は、救いの歴史の短いまとめとなっています。このたとえの中でイエスは、自分自身を罪人の所に遣わされた御父の望みについて教えています。たとえの中で、「ぶどう園を作った人が農夫たちから収穫を受けるために僕たちを送つたように、神はイスラエル人に回心させ、彼らを」自分のもとに戻らせるために預言者たちを遣わしました。農夫たちが、僕たちを殴つたり、侮辱したり、殺したりしたように、イスラエル人たちは預言者たちを無視したり、殺したりしました。たとえの中でもぶどう園の持ち主に、愛する一人息子がいました。この人は『わたしの息子なら敬つてくれるだろ』（マコ 12,6）と考えたので、収穫を受け取る最終的な手段として息子を送りました。同じように、神である父が最愛の子をこの世に遣わしたのは、預言者たちにできなかつたことを御子が実現するためです。たとえの農園主と同じように、御父が求めたのは、人々がイエスを殺すことではなく、イエスを敬うことなのです。なぜなら、人々がイエスとその愛を受け入れることによって、罪、つまり神の望みに逆らう生き方を諦めて、愛に生きるようになることを求めたからです。福音記者聖ヨハネが教えた通りに（ヨハ 3,20）、人間はイエスを拒むことによつてでは

なく、イエスを信じて受け入れることによつて、また、イエスを殺すことによつてではなく、イエスを敬つて愛することによつて、神の望みに従う者となつて永遠の命にあづかるのです。

人間の隠れた考えをも知つておられる神は、農園主と違つて人々がイエスをどのように扱うかをよく分かつておられたに他ならないのです。それでも、滅びに向かつていた人類を救いたいという望みを諦めず、独り子を彼らの手に引き渡されました。これによつて、神の私たち一人ひとりに近づきたいという望みがどれだけ強く、また、私たちが神の愛を受け入れ、神と結ばれて、永遠に神と共に生きることを、神がどれほど熱心に求めておられるかを、示してくださつたわけです。

神の望みの大きさを見れば、神が私たちを「自分のもとに導き、私たちを最高の幸福で満たしてくださるために、最も小さなチャンスさえも無駄にされず、あり得る可能性をすべて生かし、「自分の力を惜しむことなく、全力を尽くしてくださるに違いないと私たちには確信をもつ」ことができるのです。

参照： マコ 12,1-11; マク 3,14-18

「わたしは今日、天と地をあなたたちに対する証人として呼び出し、生と死、祝福と呪いをあなたの前に置く。あなたは命を選び、あなたもあなたのお子孫も命を得るようにし、あなたの神、主を愛し、御声を聞き、主につき従いなさい。」申 30,19-20

イエスは、出会つたすべての人々のために真の善、彼らが最も必要としていた善を行つたことによつて、彼らに対する自分の愛を表してくださいました。それにもかかわらず、彼らは不正な裁判を行つて、イエスを侮辱し、拒否し、それから死刑の判決を下したのです。こうして彼らは、神の望み通りに命を選ぶ代わりに、その望みに逆らつて死を選んだのです。福音記者聖ルカが強調しているように（ルカ 22,53）、それは神の支配の時ではなく、人々が神に逆らつて偽りの善に従う暗闇の時でした。

バラバの釈放は、このような神の望みに適わない、誤った選択を描き出しています。裁判で群衆には、神の子であつたイエスを釈放するか、バラバを釈放するかという選択が与えられました。バラバという名は、息子を意味する「bar」・父を意味する「abba」

という単語から成り立つていて、「父の息子」を意味します。当時それは、賊の親分の息子が付けられた名前であつたそうです。要するに、群衆の前に一人の息子が立たされたわけです。一人は、命を与える父の息子で、もう一人は、命を奪う人の息子でした。群衆の決断に従つて釈放されたのは、人間を殺す人の子でした。命の与え主である父の子は、死刑に処されることになりました。これは、イスラエルの歴史の繰り返しでした。なぜなら、過去にも、度々同じような選択に直面したイスラエル人は、預言者をとおして神によつて命と祝福を選ぶように呼ばれても、死を選んで命を拒否し、呪いを選んで祝福を拒んだからです。

この裁判とその判決は正義を侮辱するもので、神のみ旨に背くものとして、人間が犯した大きな罪であつたと言えるでしょう。けれども、それだけ大きな罪さえも、イエスの愛を止める」とや、神の救いの計画を砕く」とはできませんでした。

参照：ルカ22,53；マコ15,6-15；ヨ30,15-20

## 十字架に付けられた愛

「イエスは、方々を巡り歩いて人々を助け、悪魔に苦しめられている人たちをすべていやされたのですが、それは、神が御一緒だったからです。」

使 10,38

大きな苦しみには、人間が普段かぶっている仮面をはぎ取り、その人の本当の顔を現す力があります。というのは、多くの人が、大きな苦しみに逢つて初めて自分の本音を出し、自分が本当に何を感じ、何を考え、何を大事にしているかを示すからです。苦しみにおいて、時に、疲れやちよつとした困難のような小さな苦しみにおいて、友情や愛と思われたものは偽物であつたと分かることがあります。「誰かが、本当の友人であるかどうかは困っているときに分かる」というポーランドのことわざがありますが、それを言い換えれば、「愛が本物であるかどうかは苦しんでいるときに分かる」と言えるでしょう。

出会つた人々のために、いつも善を行つて愛を示したイエスは、非常に大きな苦しみ

の中にあつても、殆どすべての力を失つて、死を目前にしても、周りにいた人々を相変わらず愛し続けていました。自分の十字架を背負つたときに、泣いていた婦人を慰めました。十字架に付けられていたときに、愛する母マリアに対してだけではなく、自分を十字架につけたローマの兵士や、死刑に当たるような悪事を行つた人に対しても思いやりの心をもつて、彼らに一番必要な善を行いました。そのような態度と行いによつて、イエスの愛は、惡にも苦しみにも負けない、真の愛であつたということが分かるわけです。

参照：[四福音書](#) 19,26-27; ルカ 23,26-43

「イエスは大声で叫ばれた。『父よ、わたしの靈を御手にゆだねます。』」  
「う言つて息を引き取られた。」ルカ 23,46

イエスが十字架に付けられて、そのまま死んだということは、ユダヤ人にとって、イエスが神によって遣わされたのではなく、また神の名によつて語つたのでもなく、ただ自分から話しただけだということを表し、イエスが本当のメシアではなく、ただメシアであると自称しただけだというような、彼らの確信を証拠立てるものでした。ご自分の苦しみと死は、イエスにとつても、ご自分のアイデンティティを疑う誘惑、つまり自分が神の子であり、神によって遣わされた救い主であるという自分の確信を疑う強い誘惑であつたでしよう。

十字架に付けられていたとき、イエスは神の支えを、少なくとも神が一緒にいてくださり、本当に愛してくださつていると感じることを、最も必要としていました。しかし、その代わりに、父である神にも見捨てられたかのように、もう誰にも頼ることができないかのように感じていました。このような孤独感は、イエスにとつて非常に大きな苦しみをもたらしたに違いないと思います。もしかしてこの苦しみは、鞭打たれたときや茨の冠をかぶせられたときの、また十字架に釘付けにされたときの肉体的な苦しみよりも、辛くて激しい苦しみだったかもしれません。けれども、そんな状況においても、イエス

は自分の感情や感覚ではなく、あいかわらず父である神を信頼していました。人間的に考えれば、自分に何の報いも与えられそうもなかつたにもかかわらず、イエスは父の望みに適う仕方で最後まで愛し続けました。父の望み通りに父を愛し続けても、何の利益も得なかつただけではなく、自分の命を含めてすべてを失つたかのように見えた現実に逆らつて、神である父が絶対に自分から離れることがないと信じ続けたイエスは、愛していくがゆえに自分の命を父の手に委ねました。このようなイエスの姿を見れば、神に対するイエスの愛が、本当に何の利益も求めていない、純粹で本物の愛であつたということが分かると思います。

以上述べたことに基づいて、イエスは多くの苦しみを受けたことによつてではなく、大きな苦しみの中にあつても神と人を愛し続けたことによつて、神から与えられた使命を完全に成し遂げたということが言えると思います。

神の御独り子は、何の罪も犯すことがありませんでしたが、人間になることによつて自ら人類と縁を結んで、この地上に生まれてから死にいたるまで、全人類が犯した罪の結果にあざかりました。肉体の死、特に神から離れているように感じたというイエスの

靈的な死の体験は、罪の最終的な結果を受け入れることでした。こうして、自らは罪を犯すことによって神との絆を一度も切つたことや傷つけたことのなかったイエスは、人間が罪を犯すことによって生み出される、罪の最終的な結果、すなわち、「神の無い暗闇」に神を導き入れました。もっと正確に言えば、イエスは神が無いと思われる暗闇にも、実は神がおられるということを現してくださいましたのです。なぜなら、イエスはこの暗闇に留まることなく復活して、「天の栄光」、つまり父である神の命に入られたからです。こうして、私たちが罪を犯すことによってどれほど神から離れても、それは決して神のもとに帰ることができないほど大きな距離ではないということをイエスは表してくださいましたのです。というのは、神は絶対に私たちを手放すようなことをなさらないし、私たちを諦めてしまわれることもないからです。私たちが神から離れようとしても、神はいつも私たちについて来られます。私たちが神との縁を切ろうとしても、神は私たちを愛し続けてくださるので、私たちと絶えず繋がっています。それゆえに、罪を赦していただくこと、すなわち神と和解することと、神と愛の交わりのうちにすることは、生きている限りいつも可能なのです。この可能性を生かすためには、私たちがイエスのよ

うに自分の命を神の手に委ねるだけで十分なのです。

参照：マタ 27,39-50 .. ヘブ 49,14-16 .. マク 16,32 .. 1°ル 2,23

## どうしてイエスは最後まで愛することができたのでしょうか

イエス・キリストの愛の偉大さとその力強さを知った人が、その愛の源について問い合わせたり、その愛そのものをもつと深く理解したいと思つたりしたとしても、不思議なことではないと思います。どうしてイエスは、それほど大きな苦しみのさ中でも愛し続けることができたのでしょうか。どうしてイエスは、それほど大きな苦しみを負わされた後に自分の加害者さえも愛することができたのでしょうか。このような問い合わせに対する答えを聖書の中に見出すことができると思います。

## イエスの発達

「キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執

しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、へりくだつて、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。」 フイリ 2,6-8

イエス・キリストは受肉された神のことばであり、神の永遠の御独り子で、三位一体の神の第二ペルソナです。けれども、聖書やカトリック教会の教えによれば、凡そ2000年前に、ベツレヘムで生まれたイエスが完全な愛をもつて、最後まで愛することができます。その身分のためであつたわけではありません。第一バチカン公会議の「現代世界憲章」の中には、イエスについて次のように書いてあります。「キリストは人間の手をもつて働き、人間の知性をもつて考え、人間の意志をもつて行動し、人間の心をもつて愛した。かれは処女マリアから生まれ、真実にわれわれのひとりとなり、罪を除いては、すべてにおいてわれわれと同じであった。」（現代世界憲章 22）

イエスの神秘、特にイエスの愛の源を知りたいならば、イエスは罪を除けば、私たちと同じ人間であったという事実を真剣に受け止めなければならないと思います。

「キリストは御子であるにもかかわらず、多くの苦しみによつて従順を

学ばれました。そして、完全な者となられたので、御自分に従順であるすべての人々に対して、永遠の救いの源となり、神からメルキゼデクと同じような大祭司と呼ばれたのです。」ヘブ5:8-10

イエスは確かに優れた人間でありました。そしてそれだけではなく、辛い苦しみの中でも愛することのできる完全な人間になつたのです。けれども、最初からそうであつたわけではありません。福音記者聖ルカは、イエスの子ども時代について書いた箇所で、イエスが他の人と同じように発達したということを強調しています。イエスは背丈だけではなく、知恵も、神と人間に對する愛においても成長していきました。それから、福音記者聖マタイは、イエスの人生に起つた大きな変化について書いています。この変化は、それを見たナザレの人々、つまりイエスのことを子どもの時から知つていた人々を非常に驚かせるほど意外なものでした。この変化はナザレの人たちにショックを与え、彼らがそれをなかなか認めることができずに、イエスを殺そうと図つたほど大きなものであつたとすら言えると思ひます。

参照：ルカ2,39-52

「[イエスは]故郷にお帰りになつた。会堂で教えておられると、人々は驚いて言つた。『この人は、このような知恵と奇跡を行う力をどこから得たのだろう。この人は大工の息子ではないか。母親はマリアといい、兄弟はヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダではないか。姉妹たちは皆、我々と一緒に住んでいるではないか。この人はこんなことをすべて、いつたいどこから得たのだろう。』」 マタ 13,54-56

ユダヤ人の習慣に従つて、イエスは12歳の時から、ナザレの他の男性と一緒に安息日に会堂に集まり、聖書を朗読し、それについて話し合つたり、分かち合つたりしました。30歳のイエスの言葉に対する人々の反応を見ると、その時までのイエスの話し方や振る舞い方は普通であつて、イエスはナザレの他の人と同じように話し、同じようなことをしていて、特に目立つようなことはなかつたと推測することができると思います。人々は、イエスのことを、特別な知恵や力ではなく、大工の職業と結び付けていました。

けれども、今現在は、イエスが知恵の言葉を語り、奇跡を行う力を示しています。皆は不思議がつて、大工の息子が元々もつていなかつたこのような知恵や力を、一体どこから得たのかと問い合わせていました。

イエスの変化は、彼の言葉や行いに影響を与えただけではなく、イエスの生き方を全面的に変えました。その後、イエスはナザレにとどまることなく、今まで住んでいた家とヨセフから受けついだ仕事を放棄して、旅立ちました。そしてパレスチナを巡り歩きながら、神の国についての良い知らせを、力強く権威をもつて宣べ伝える先生として生きるようになりました。このような変化はいつ起こつたのでしょうか。それを起こしたのは、何だつたのでしようか。

福音書を一度でも読んだことのある人なら、この変化はイエスが洗礼者ヨハネから水の洗礼を受けた後に起こつたということが分かるはずです。けれども、宣教活動や受難のときに表れたイエスの愛の源を知るために、イエスが洗礼者ヨハネから受けた洗礼の意義と、その洗礼に伴つた出来事の意義を理解する必要があると思いますので、これからこれについて考えてみたいと思います。

参照：マコ 6,1-6、ルカ 4,16-30

## イエスの洗礼

イエスが使命を受け入れて、それを果たし始める

「アンナスとカイアファとが大祭司であったとき、神の言葉が荒れ野でザカリアの子ヨハネに降つた。そこで、ヨハネはヨルダン川沿いの地方一帯に行つて、罪の赦しを得させるために悔い改めの洗礼を宣べ伝えた。」  
ルカ 3,2-3

洗礼者ヨハネが授けた悔い改めの洗礼は、罪の告白と神の掟を守る決心、つまり神のみ旨に適う生き方をする決心が伴う償いの儀式でした。この洗礼を受ける直接の目的とは、メシアの到来のために準備することでした。考えてみれば、イエスは罪を犯したこと

とがなかつたし、イエス自身がメシアであつたので、この洗礼を受ける必要は全くなかつたわけです。また、洗礼者ヨハネの周りに集まつていた（マタ 21,32）大勢の罪人の中に入ることは、完全に清い方であつて、罪を憎んだイエスにとつて非常に苦しいことだつたのではないかと思います。

洗礼を受けるために近づいてくるイエスを見た洗礼者ヨハネが驚いて、イエスの依頼を断ろうとしました。そのとき、イエスはこう言わされました。「今は、止めないでほしい。正しいことをすべて行うのは、我々にふさわしい」とです。」（マタ 3,15）イエス

が言われた「正しいこと」とは、父である神のみ旨を行うことに他ならないでしょう。イエスが罪人の中に入られて、彼らと同じように悔い改めの洗礼を受けられた、つまり償いの儀式を行つたのは、父である神がそう望まれたからです。神が求められたのは、イエスがあがないのわざ、つまり人間を罪の奴隸状態から解放するわざを、このようにして始めるということだつたのです。

救い主を迎える準備期間であった旧約時代には、救い主のことだけではなく、救い主の働きを理解するために必要な程度までは、神のことと人間のことが啓示されました。

度々イスラエルの民と愛の契約を結ばれて、何回もイスラエル人の罪を赦してくださつた神は、罪人さえも愛しておられることや、罪を犯した人がこの罪を痛悔し、それから離れたいと望めば、必ず赦していただけるということを示してくださいましたのです。同時に、イスラエル人たちが神と結んだ契約を絶えず破つたり、罪に戻つたりしたことによつて明らかになつたのは、人間が完全に心を開いて神の愛を永久に受け入れることはなかなかできないということと、人間が神と和解することもできないということです。イスラエル人たちの歴史が示しているもう一つ重要な事実があります。すなわち、人間は神の愛に、愛をもつて応えることができないということです。結果として、人間は神と一致することによって、自分の存在の目的に達することができない状態にあるということが、啓示されたと言えるでしよう。そのような人々のところに、いくしみ深い神はイエスを遣わしてくださつたわけです。神が御独り子をこの世に遣わされたのは、彼が人間になつて、つまり人間性を受け入れることによって、すべての人々と結ばれてから全人類を代表して、もっと厳密に言えば、御独り子が全人類の一人ひとりに代わつて、罪の暗闇の中から神の愛に愛をもつて応えて、神と愛の絆を結ぶためなのです。このよ

うなわざによる神と人類との間の和解が実現されること、つまり永遠に続く新しい契約が結ばれることが計画されていたわけです。同時にイエスが神の愛に忠実に生きることによって、あらゆる罪を赦すことのできる神の愛、または、人間をあらゆる罪の奴隸状態から解放することのできる神の愛を、すべての人々に現しそれを伝えることを神は望まれました。ですから、イエスが悔い改めの洗礼を受けた瞬間は、神がイエスを罪人の手に引き渡す瞬間であったと言えるわけです。あるいは、イエスの方から考えれば、それは父である神が計画された救いのわざを全うするために、全人類の罪の結果を受け入れなければならないこと、それから預言者イザヤが予言した通りに罪人の手の中で苦しむ僕になるということを、はつきりと意識しながらイエスがこの使命を受け入れる瞬間でした。それから、イエスにとつて悔い改めの洗礼を受けることは、神の小羊の役割を受け入れること、つまりすべての人の罪のためのいけにえになることを意味していましましたので、それはイエスのへりくだりの瞬間でもあったと言えます。この意味では、水の洗礼は血の洗礼、つまり、イエスのもつとも大きなへりくだりであつた十字架の死の先取りであつた、ということまで言えるわけです。

参照：マタ 3,13-17 .. ヨハ 1,29-34

## イエスの使命と彼の本性が公に現される

「わたしはこの方を知らなかつた。しかし、この方がイスラエルに現れるために、わたしは、水で洗礼を授けに来た。」ヨハ 1,31

福音記者聖マタイが伝えているように（マタ 3,16-17）、「イエスの愛と信頼に満ちた謙遜な態度に応えて、父である神は人間が罪を犯した結果として閉じてあつた天を開き、聖靈を送り、イエスが「自分の愛する子である」と公に宣言されました。開かれた天は、イエスにおいて、罪に満たされた人間の世界に神が決定的に入られたことを示します。イエスはその従順によって、また、あらゆる状況において、たとえそれに苦しみが伴つても、父のみ旨に忠実に従う息子の生き方を承諾することによって、父に対する愛と信頼を表しました。この愛と信頼のゆえに、罪に満たされた世界、サタンの王国であ

ると言わっていたこの世界（ヨハ 13,31; 14,30）に生きてても、イエスは常に父である神と繋がっていました。ですから、この世に来られてからは、イエスが天と地を繋げていたと言えるわけです。最終的に、イエスは十字架上の愛の奉獻によつて、神の愛を完全に啓示したという意味で、人間と神の間にあつた垂れ幕を破つて（マコ 15,38）、すべての人々に神を知る可能性、神に近づく可能性を与えてくださつたのです。

旧約時代に預言者たちは、その活動を始める前に必ず油を注がれました。油を注ぐ儀式は、油注がれた人たちが神によつて選ばれ、神によつて遣わされたことのしるしでした。イエスは聖靈によつて「油注がれた者」つまりメシアとなりました（使 10,38）。このように、神はイエスを選んだこと、彼をメシアとしてこの世に遣わしたことを示してくださいました。聖靈がイエスの上にとどまつたときから、イエスは全人類のために聖靈の源となりました。イエスが行つた各々の奇跡やイエスが語つた一つずつの知恵の言葉は、この聖靈の降臨を反映するようなものになつていきました。言つて見れば、イエスご自身が「天の破れ」となつて、贖いのわざが実現されたときから、世の終わりまで、神はその「破れ」をとおして聖靈を、つまり「自分の命と愛をすべての人々に送つてくれ

ださるのです。

イエスの他に少なくとも後もう一人が、イエスに降つてくる聖靈を見ました。それは洗礼者ヨハネでした。ヨハネはメシアを迎えるために準備の出来た数少ない人のうちの一人でしたので、自分のところに近づいてくるイエスが、メシアであるということが分かつたのです。そうすると、ヨハネは聖靈がイエスの上に降るというしるしを、必要としていなかつたと言えるでしょう。それにもかかわらず、このしるしは、きっと彼の確信を強めたに違いないと思います。そしてこの体験をしたヨハネは、次の証しを立てることができました。「わたしは、「靈」が鳩のように天から降つて、この方の上にとどまるのを見た。わたしはこの方を知らなかつた。しかし、水で洗礼を授けるためにわたしをお遣わしになつた方が、『「靈」が降つて、ある人にとどまるのを見たら、その人が、聖靈によつて洗礼を授ける人である』とわたしに言われた。」（ヨハネ1,32-33）要するに、このしるしは、人々がヨハネの証しに基づいて、イエスをメシアとして信じて、イエスに従うことができるためには必要なものでした。

聖靈がイエスの上に降つた後に、次の声が聞こえました。「これはわたしの愛する子、

わたしの心に適う者」（マタ3,17）。この言葉によつて父である神は、イエスの最も深い神秘、イエスの最も深い本性を公に現してくださいさつたわけです。それは、マリアの息子であるこのイエスが、同時に全能の神の子であり、神の望みに完全に適つて生きている方であるということでした。

開かれた天、聖靈の降り、父である神の宣言はまた、罪と悪に対する完全な勝利の約束であり、救いのわざの実現の約束でもありました。この体験はイエスにとって、父から与えられた使命を果たすために、すなわち罪人の手に引き渡された今から最後まで彼らの間にとどまるために、また、彼らの手からあらゆる苦しみや残酷な死さえ受け入れながらも、彼らを愛し続けるために必要な希望と力の源になつたことでしょう。今や、イエスの使命と彼の本性が公に現されたがゆえに、イエスは神によつて遣わされた者として、また、聖靈によつて洗礼を授けることの出来る者として、その活動を始める事ができるようになりましたが、それと同時に、隠れた生活が終わつたわけですので、サタンとその他の神の敵による攻撃も可能となつたのです。

ベツレヘムで生まれ、ナザレで育てられたイエスが、神の子でメシアであると分かつ

たサタンは、すぐにイエスを襲い始めました。サタンの攻撃やその誘惑は決して望ましいことではありませんが、それはイエスにとつて、自分の使命の特性、また、イエス自身が神の子であることを、どのように理解していたかということを表す機会になつたのです。サタンは、神の子であることが苦しむことではなく、逆に何らかの特権をもつことであると、イエスに思い込ませようとした。そのために、イエスが神から自分の問題を解決してもらうことや、あらゆる苦しみを遠ざけてもらうことを要求するように提案したわけです。それからサタンは、イエスが世界を支配したいのならば、何か辛い働きをする必要はなくて、この世の支配者、すなわちサタン自身の前にひれ伏すだけで十分であると、イエスを納得させようとしたのです。このような誘惑によつてサタンは、多くの人々にとつて神の計画よりも気楽で魅力のあるように見える提案を与えて、神が示してくださいさつた道からイエスを逸らそうとしたわけです。けれどもイエスはこのような誘惑をすべて退けました。なぜなら、神の子であるということは、何らかの特権に基づいて、特別な扱いをされたりすることではなく、父である神との愛の交わりに生きること、自分の意志を常に父の意志と一つにすることであると知つていたからです。イエ

スは、御独り子が人々に仕えるいにじりにて彼らに父の愛を現し、そしていの愛によつて彼らを父のもとに引き寄せる」ことを、父が求めておられる」とも知つていました。父との一致を保ちたいという揺らぐことのないイエスの望み、また、父から与えられた使命を忠実に果たしたいという何よりも強い望みは、自分が神の子であるというイエスの自覚によつて生み出されたものでした。こうして神の子としての本性は、イエスのすべての望み、すべての考え、すべての行いを形作るものだつたと言えるわけです。ナザレで見極められたこの本性は、イエスにとって力の源であると共に、勇気と自由の源にもなつていたと聞えるでしょう。

参照：マタ 6,25-33；マル 5,17-20；マタ 26,63-68

## イエスの自己認識と自己同一性（アイデンティティ）の発達

「それから彼[イエス]は彼ら[両親]と共に下つて行き、ナザレに來た。  
彼は彼らに服していたが、彼の母はこれらのすべての言葉を自分の心になつていていたと聞えるでしょう。

とどめた。そしてイエスは、知恵と背丈においても、また神と人からの好意においても、増し加わっていった。」ルカ2,51-52

四つの福音書は、イエスの写真というよりも、別々の画家が描いたイエスの肖像画のようなもので、福音記者たちは、異なる状況に生きていて、異なる問題に直面していった共同体のためにそれぞれの福音書を書き記したので、その共同体にとって特に重要であると思つたイエスの性格や生き方の特徴とか、イエスの教えのある側面を強調したり、その教えの意味を良く理解してもらうために、順序や表現を変えたりしました。その結果、四つの福音書において色々な違いが見られますが、この違いはイエスを知るための妨げになつてゐるのではなく、逆にイエスの姿をより豊かにするものであつて、イエスを知るのに大きな助けとなつてゐるのです。

聖マルコによる福音書において、「メシアの秘密」というものがあります。イエスは人々にとつて時期尚早のため、つまり人々が十分に準備されていないために、ご自分が神の子でメシアであるということを、人々はまだ知らない方がいいと判断しているよう

です。そのため人々の前にご自分の本性を隠していますし、ご自分の本性を知っていた悪霊には、また、ご自分のことを知った人には、それを言い広めるのを禁じます。弟子たちはイエスがメシアであるということを、イエスがガリラヤでの活動をし終えて、エルサレムに向かう旅をし始めるとき、つまり福音書の後半でやつと分かるようになります。聖マルコの福音書において、イエスが神の子であることを、イエスが生きているうちには誰一人分かりませんし、イエスが亡くなつた後にもただ一人の人がそれが分るだけなのです。しかも、それはイエスの弟子ではなく、ローマ人の百人隊長でした。恐らく聖マルコは、自分の共同体のキリスト者たちに、イエスと共にいた人たち、イエスの行いを自分の目で見てイエスの話しを自分の耳で聞いた人たちでさえ、イエスが誰であるかということを最初から分かつていたのではなく、イエスに従う内に少しづつ分かつて来たということを示すことによつて、イエスが誰であるかということをまだ良く分かつていなかキリスト者たちも、イエスに忠実に従えば段々と分かるようになるということを、教えたかったのではないかと思います。歴史的に見ても、聖マルコが教えた通りに、使徒たちでさえ三年間イエスと共に生きてきたにもかかわらず、最後までイエスの

ことを理解していませんでした。彼らは聖霊を受けて、イエスが復活したという出来事をとおして、イエスと共にいた時の体験を振り返って見て初めて、イエスの言葉や行いを理解しました。しかし、すぐに完全に理解したのではなく、与えられた使命を果たし、分かつたことを宣べ伝えているうちに、彼らの理解が深まつていったのです。イエスのことを理解するこの過程は、もうすでに二千年以上も続いていますが、イエスのことを完全に理解したと言える人はいないはずです。イエスは今でも神秘的な存在であり続けているわけです。

聖マルコは以上のようにイエスのことを描いていますので、彼は聖マタイや聖ヨハネと違つて、イエスが洗礼者ヨハネから洗礼を受けた後に起こつた出来事を、イエスの本性とイエスの使命が公に現された出来事としてではなく、イエスの個人的な体験として描いています。この福音書の中で、神は直接イエスに向かつて次の言葉を語ります。「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者。」（マコ 1,11；ルカ 3,22）聖マルコは、この声が誰かに聞こえたとか、イエスの上に降る聖霊を誰かが見たということを書いていないので、洗礼者ヨハネも周りにいた人たちも、何か特別なことが起こつたというこ

とに気が付かなかつたというような印象を与えています。恐らく聖マルコは、イエスが公活動を始める前に体験したことこのように描くことによつて、神を「自分の父として、また、愛されている神の子として自分自身を認識すること、要するに自分の本性を知ると同時に、それを自分の最も重要なアイデンティティとすることが、イエスの人生において決定的な事実であり、イエスの活動の中に見られる力の源であつたということを、伝えようとしたのだと思ひます。

イエスは罪以外の点では私たちと同じ人間であり（フイリ 2,6-8; ヘブ 4,15-16）、私たちと同じように成長し発達していくので、地上の人生の初めは自分の本性を知らなかつたということを、確かな事実として指摘できると思ひます。従つて、イエスは自分が神の子でありメシアであるということを、いつ、またどのようにして知るようになったかという問い合わせ、根拠のあるものであるだけではなく、イエスのことを理解するために非常に重要なことになるわけです。現代の聖書学者の中には、聖マルコと聖ルカが伝えた言葉によつて、神がイエスに彼の本性を現したと考えている人がいます。この学者たちは、イエスは洗礼を受けた後に初めて、自分が誰であるかということと、神が自

分に与えた使命を知つたということです。ですから、この体験がイエスの人生を変えたと言つてはいるわけです。けれども、そのような解釈は、十二歳のイエスが神殿に残つて律法学者たちと話しをしたという、福音記者聖ルカによつて描かれた場面に合わないのではないかと思います。なぜなら、マリアとヨセフに語つた言葉によつて、イエスはすでにその時、神が自分の父である」といふ、神の子である自分にとつて父から与えられた使命を果たすことが何より重要であることを、知つていたことを表したからです。

けれども、自分の本性を知つていても、十二歳のイエスは神の子として生きて、メシアの活動を開始するのではなく、両親と一緒にナザレに戻り、後十八年間もヨセフの家に住み、ヨセフの仕事をしています。恐らく十二歳のイエスは、自分の本性や使命を知つても、まだまだ神の子として生き、メシアの使命を果たすことができなかつたと推測することができると思います。自分の本性を忠実に生きるために必要であつた」の十八年間を、聖ルカが次のように描いています。「それから彼[イエス]は彼ら[両親]と共に下つて行き、ナザレに來た。彼は彼らに服してゐた…そしてイエスは、知恵と背丈においても、また神と人からの好意においても、増し加わつていつた。」（ルカ 2,51-52）

それは、非常に短い描写ですが、その期間の本質を理解するためには十分なものだと思います。

この準備期間の最初の特徴として出てくるのは、従順です。それは、両親に対する従順、特に「恵み溢れる方」であった母マリアへの従順でしたが、この従順は神への従順を表していると思います。ヘブライ人への手紙の中に書いてある言葉によれば（ヘブル2,8）、この従順のためにこそ、イエスが完全な人間になったのです。後ほどイエスは、「死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした」（ファイリ2,8）が、恐らく子ども時代にそれは、自分の身分から生じる責任を果たすことであったでしよう。イエスは、まずマリアの子で、大工の息子として育てられましたので、イエスにとつて従順というのは、懸命に大工という肉体労働をし、自分の家族を支えながら、他の人を助けることでした。同時に、イエスはダビデの子孫で、ガリラヤのナザレの住民、ユダヤ教の信徒でした。ですから、イエスにとつて従順とは、モーセの律法を守ること、色々な習慣に従い、定期的に祈りをすること、神のことばを読み、それを暗記すること、ナザレの会堂で毎週行われた集会に参加すること、毎年エルサレムの神殿へ巡礼し、祭りや

祭儀に参加することによつて、神の救いのわざを記念することでした。神への従順は、「神への畏れ」を表しています。そして、「主を畏れる」とは知恵の初めです。」(詩 111,10; シラ 1,14-20) 知恵の書（知 8,4）によると、真の知恵は神の神秘を知ることであり、この知恵をもつ人は神の善を現すことができるのです。そのような発展によつて、イエスは人間として成熟していました。そして何よりも大切なこととして、段々と神が求めているような人になり、神との愛の交わりを深め、益々神との愛の絆を強めていました。そのような発達の結果として、イエスは自分が神の子であると強く自覚し、その自覚はイエスにとって最も深い自己認識と同時に最も重要な身分、つまり自分のアイデンティティになつたので、神の子と名乗りきることができたわけです。イエスは人間として十字架上で完成されましたので、その発達は恐らく、死に至るまで続くものであつたのでしょう。しかし、洗礼を受けるときにイエスにとって、マリアの子であり大工であるということよりも、また、ナザレの住民でありユダヤ人であることよりも、神の子であるという自分の身分が重要になつていたので、イエスは神から与えられた使命を果たすために、マリアのもとから離れると同時に、自分の仕事と安定した生活から離れることが

できましたし、ナザレから追い出されても、他のユダヤ人から異端者として見下されても、この活動を続けることができましたし、最終的には父である神から与えられたこの使命を最後まで忠実に果たすために、辛い受難と残酷な死を受け入れることさえできたわけです。

## イエスの父と神の国

イエスが神の子に相応しい生き方を知っていたのは、父である神の愛とその愛に基づく神の働きとを知っていたから、つまり神が父であることがどんなことであるかを知っていたからです。「父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛してきた」(ヨハ15:9)と言うことによつて、イエスは神の愛を「自分の体験から知つていたことを示しています。イエスは父である神の愛を知つていたから、「自分の弟子たちを、また、「自分に対し敵意をもつていた人々や、「自分を苦しめ十字架に付けて殺した人々を、

愛することができたのです。その意味では、父である神の愛がイエスご自身の愛の源であつたと言えると思います。イエスは神の愛を体験していったからこそ、イエスにとつて神は何よりも「アッバ」、即ち「愛する父」であつたのです。神は創造主として命の源であり、また、世界の絶対的な支配者としていつもご自分が創造されたものを支え、導いてくださるという意味だけで、父であるのではありません。神が父であるとは、神が私たちの善だけを求め、いつもそばにいてくださり、いつも支え、守つてくださり、人間に命だけではなく、ご自分の愛も注いでくださるという意味なのです。人間はこのようないい父である神と、親しい愛の交わりのうちに生きることができます。しかも、この交わりは永遠に続くものであって、人間と神の完全な一致をもたらすものなのです。イエスはご自分の体験に基づいて、このような実感と確信をもつようになり、そしてそれについて語つただけではなく、この現実をご自分の生き方や神に対する態度によつて現してくださいさつたのです。

神のことを「アッバ」と呼ぶことによつてイエスは、神に対する最大の愛を示したとともに、小さい子どもが自分の親に対して抱いているような、何の疑いもない信頼とそ

の信頼に基づく絶対的な従順を示していました。このように神を愛し、神に信頼していたイエスは、ご自分の命を神である父に完全に委ね、神と親しい交わりの内に生きていたからこそ、悪魔の誘惑とか、親類の誤解や親しい友の裏切り、また激しい迫害や死に至る残酷な受難というような苦しみでさえ、イエスを父である神から引き離すことはできなかつたのです。イエスの人生は、神の愛に対する完全な応えになり、イエスが本当に神の愛する子であるという事実の完全な表現になりました。イエスは確かに人間の心で愛していましたが、父である神と深く結ばれていたがゆえに、イエスの心が神ご自身の愛で満たされていたのです。ですから、イエスは愛に生きることによつて、神ご自身の愛を現わしてくださつたことになるわけです。

すべての人々にご自分の愛を与えること、この愛によつてすべての人々を結び合わせ、神の大きな家族にすることは、神の最も大きな望みであつて、神が人類を創造してくださつた目的であるということをイエスが知つたときから、神のこの望みはイエス自身の最も大切な望みとなり、それを実現することがイエスの使命と人生の目的となつたのです。「わたしが来たのは、地上に火を投ずるためである。その火が既に燃えていたらと、

どんなに願っている」とか」(ルカ 12,49) と語ったイエスは、<sup>3</sup>自身が神に対する愛によつて燃えていたように、すべての人々もこの愛によつて燃えるようになることを、自分は求めているということを宣言し、人々の心の中に神に対する愛の火を付けることが自分の使命であり、この世に生まれてきた理由であるという確信を示しています。

すべての人々が愛の絆、しかも永遠に解かれる」とのない絆によつて、神とも他の人々とも結ばれているという、来るべき現実は、イエスにとつて人類のための大きなビジョン（未来像）となりました。イエスが出会つたすべての人々に対して愛を実践したのは、この人たちを少しでも助け、彼らの苦しみを一時的に和らげるためだけではなく、何よりも彼らに神の愛を現わし、この愛によつて彼らを神のもとに引き寄せて、このビジョンを実現するためだつたのです。このビジョンの実現がすべての人々にとつて最高の善、最高の幸福であると知つていたイエスは、その実現のために<sup>4</sup>自分が持つていたすべてのものをかける覚悟や、あらゆる苦痛を受け入れ<sup>5</sup>自分の命さえも犠牲にする覚悟をもつていたのです。イエスはこのビジョンを「神の国」と名付けましたが、教皇ヨハネ・パウロ二世が現代人の感覚に合わせてそれを、「愛の文明」と呼んでいたようで

す。

上述した通りに、イエスは、ナザレでの静かな生活の中で、何か奇跡的な出来事や特殊な修業によってではなく、一般的な家庭の生活、毎日の仕事とユダヤ人としての誠実な生き方によって、すなわち、日常的で小さなことにおいて神のみ旨を果たすことによつて、愛する父として神を知つたわけです。おそらく、イエスはそのような自分自身の体験に基づいて、「「ごく小さな事に忠実な者は、大きな事にも忠実である」（ルカ 16.10）と教えたことでしょう。イエスが普通の生活の中で神の愛を体験し、「自分が神の愛する子である」という事実を知るようになり、この愛の内に成長することによつて、最後まで愛することの出来る人間になつたということを見ると、誰でもイエスと同じように、愛することができるようになれるということが分るはずです。というのは、すべての人々が神によつて愛されているので、すべての人々がこの愛を体験し、この愛を受け入れ、この愛に成長することができるからなのです。ところがイエスのように愛することは、すべての人にとって可能なものであつても、殆どの人々がその可能性を生かしていないというのが現実です。次の章では、そんな現状について考えてみたいと思います。

## どうして、こんなに多くの人々が、 最後まで愛していないのでしょうか

今まで見てきたように、イエス・キリストは、「自分自身の生活をもつて、愛する」とはどんな状況においても可能であるということを、示してくださいました。またイエスは、そのような愛の源やこの愛に忠実に生きるために必要な力の源をも、教えてくださいました。しかし、私たち自身がこの愛の泉から汲んで、イエスと同じように愛に生きるようになるためには、先ずこの泉に近づくのを妨げるものを知り、それを取り除く必要があるのです。一つの基本的で私たちが一番陥りやすい妨げというのは、自分自身の愛する能力を否定することではないかと思います。

## 人間の愛する能力

「あなたがたに新しい捷を与える。互いに愛し合いなさい。わたし  
があなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」ヨ  
ハ 13,34

福音記者聖ヨハネが教えているように、「万物は言（ハ）とば）によつて成つた。成つたもので、言（ニ）とば）によらずに成つたものは何一つなかつた」（ヨハ 1,3）のです。イエス・キリストは「肉」つまり眞の人間になつたこの「言（ニ）とば）」（ヨハ 1,14）ですでの、イエスこそが誰よりも人間のことを知つてゐるし、誰よりも私たちの善、私たちの幸福を求めておられる方であるということは確かです。それゆえ、私たちは、イエスが私たちに何かを要求されるならば、それは私たちにとつて善いものであり、それから、たとえそれが私たちに無理であるように見えても、実際には可能なものであるといふ確信をもつことができるわけです。その意味で、イエスの人間についての教え、また人間のための指示や要求などは、人間の隠された能力を現すものであると言えます。私たちは、人間らしく生き、充実した人生を送りたいならば、イエスの教えによつて自

分自身の最も深い、最も優れた能力を知り、それを認めた上で、その能力を発展させなければならないのです。

イエスの最も難しい要求、と同時に最も肝心な要求というのは、イエスが愛したように愛すること、しかも私たちがこの愛において、神ご自身が完全でおられるように完全になる（マタ5,48）ということなのです。イエスのこの要求、またはすべての人に対するイエスのこの希望は、私たちの最高の能力を現しています。すなわち、例外なくすべての人々には、イエスが愛したように愛するという最高の能力があるのです。そして、私たちの愛は、神ご自身の愛のように完全なものになり得るのです。それは、非常に信じがたいことであるでしょうが、イエスを信じるというのは、イエスが教えた通りに、イエスが愛したように愛することができるので、自分自身の能力を認めることなのです。言い換えれば、自分がイエスのないように愛することができると信じない人はイエスの教えを疑い、イエスに信頼していないということになりますので、この人はイエスに従うことができないし、自分の内に隠されているこの能力を充分に發揮することもできないでしよう。

参照：マタ 5,45-48，ルカ 6,35-36

## 神から出る愛に生きる

「愛する者たち、互いに愛し合いましょう。愛は神から出るもので、愛する者は皆、神から生まれ、神を知っているからです。愛することのない者は神を知りません。神は愛だからです。」ヨハ 4,7-8

すべての人々が愛する無限の能力をもつてゐるにもかかわらず、大部分の人々はこの能力を非常に限られた程度までしか実現していかないか、それをまったく無駄にしてしまうこともあるようです。様々な人間関係や人間が造った世界の現状を見れば、人間には愛することができるのだということさえ、疑つてしまつても不思議ではありません。ど

うして、このようなことが起こっているのでしょうか。どうして私たちは、自分の最もすぐれた能力を実現することができないでいるのでしょうか。

福音記者聖ヨハネが教えてているように、愛は神から出るもので、神が与えてくださる賜物ですので、人間は自分の最も優れた能力を実現するために、神に心を開き、神がくださる愛を受け入れなければなりません。実はこの賜物を受け入れることは、神ご自身を受け入れることなのです。なぜなら、神は愛である（ヨハ4,8,16）からです。この教えが正しければ、神を信じている人は、神を信じていない人よりも愛するはずであると考える人がいるかもしれません。けれども、実際は逆になつていることも珍しくないでしょう。では、聖ヨハネの教えが間違っているのでしょうか。このような結論を出す前に、この教えの続きを知つておいた方がいいと思います。

聖書において神を信じるということは、ただ神の存在を認めるだけではなく、神を知ること、つまり愛と信頼によつて神と繋がることでもあるのです。聖ヨハネが教えている通りに、誰かが神を知つていてるかどうかということは、この人の言葉ではなく、この人の行いによつて表れるものです。すなわち、誰かが神を本当に信じているということ

が分かるためには、この人の言葉を聞くよりも、この人の行い、特に他の人に對する態度を見なければならぬことなのです。聖ヨハネはつきり言います。『彼（イエス・キリスト）を知つてゐる』といながら、その戒めを守らない者は、偽り者であつて、真理はその人のうちにはない』（1ヨハニ2,4）と。また、『神を愛している』といながら兄弟を憎む者は、偽り者である。現に見ている兄弟を愛さない者は、目に見えない神を愛することはできない』（1ヨハニ4,20）とも言います。すなわち、神を信じると言ひながら、その言葉に従わずに、隣人を愛していない人は、他の人、また自分自身を騙すということになるわけです。逆のことも言えると思います。すなわち、「神を知らない」と言う人、それとも「神を信じない」と言う人は、そう言ひながらも眞の愛に生きているならば、この人こそが神を知つてゐるし、神に對して心を開いてゐるという意味で、神を信じてゐることになるのです。この人は神について話しができず、自分の愛がどこに由来するものなのかと論理的に説明することができなくとも、この人の生き方を見ることによつて、この人が実際に神に向かつて心を開いていて、愛という神の賜物を受けているということが分かります。愛に根ざすこの生き方こそが、眞の信仰

の最も確実な表現なのです。

宗教、または、神についての意識的な確信という意味での信仰は、人間が神に近づくための支え、神の愛に心を開くための助けとなるはずです。しかし、様々な宗教の現状を見れば、残念ながら非常に多くの場合に、宗教がこの役割を充分に果たしていないとすることが分かります。時に宗教は、そのような役割を果たさないだけではなく、イスの時代のパレスチナでもあつたように、正反対のことまですることがあります。宗教が人間を神から遠ざけ、結果的に人間が愛に生きるのを不可能にするものになってしまい、宗敎の指導者たちが自分個人の利益を求めたり、人々を神のもとに導くのではなく、それと違う目的を目指したりして、信者に対する自分たちの支配力を強めるために役立ちそうな神の像、言うまでもなく神の偽りの像や、神についての偽りの教えを人々に宣べ伝え、人々の心に神に対する愛と信頼ではなく、不安や恐怖をもたらすときなのです。

多くの人が、神の「眞の顔」を隠す神の偽りの像をもつて至ってしまう、もう一つの由来があり得ます。それは自分の体験の、特に苦しみをもたらす体験の、間違った解釈

なのです。」の問題について、これから考えて見たいと思います。

## 人を神から遠ざける信仰

「律法学者たちとファリサイ派の人々、あなたたち偽善者は不幸だ。改宗者を一人づくらうとして、海と陸を巡り歩くが、改宗者ができると、自分より倍も悪い地獄の子にしてしまうからだ。」マタ 23,15

誰かが神の存在を認めているとか、自分のことを信者と呼んでいるからといって、「」の人が本当に神がどんな方であるかを知っているとは限りません。神に関する人間の思想や想像は、いくら素晴らしいものであっても、神の現実の小さな一部だけ(1コリ 13,9)を現しているものであって、神の現実そのものと比較すれば陰に過ぎないのですが、場合によつては、神の現実自体と全く異なるものでしらあるのです。神に関する人間の

思想や想像は、特に神と、人間の苦しみとの関係に関して大きな問題があると思います。神の存在を認めている人たちには、想定外の不幸やなかなか理解のできない苦しみに遭うとき、非常に多くの場合に、それを神と関連付けて、それが神の働きであると決め付けることが見受けられます。ある人々は、罪を犯した人に神が罰として苦しみを与えると考えます。この人たちにとつて神は、その被統治者から従順のみを要求する、專制君主や独裁者のような方です。このような考えによれば、神にとつては内面的な行為、つまり人の動機とか、考え方とか、確信や精神的な状態などよりも、外面向的な行為が重要ですので、誰かが神の命令に聞き従わず、神が要求しているような行動をしないならば、神はその理由を問わず、この人の心の状態に心を配ることなく、無慈悲にこの人を罰するということになります。また他の人々は、神が人間を清め、より完全な者にするために苦しみを与えると信じます。この人たちにとつて神は、人間の気持ちや望みを全く無視して、自分の夢や空想を実現するために、人間を材料として、そして苦しみをのみとして用いる、彫刻家のような方です。また別の人々によれば、神が人間に色々な苦しみを送るのは、人間の愛を試すためなのです。この人たちにとつて神は、疑い深

くて、きっと深い恋人と同じように、いつも愛や忠実の証拠を求めるような方です。そして神が苦しみを与えないまでも、人間の苦しみに對して無関心である、それとも無力であると考える人々もいます。

以上のように考へてゐる人々は、そんなつもりがなくとも、實際に神を裁いてゐるのです。神に對して有罪判決を下す人、つまり、神が自分の苦しみや不幸の原因であると決め付ける人は、神を信頼することや神に近づきたいと望むことができなくなるし、それをはつきりと意識していくても、意識していなくても、心の中で神を憎んで神からなるべく遠く離れて生きようとしています。この人が神を信じても、愛の源である神から自分を切り離すので、結果的に神が皆に与えたい愛を拒否してしまいます。ところが、愛が神の賜物であるということを知らずに、神を憎む人ですら愛を受け入れることもあります。それは正に神を知るチャンス、または、神に心を開くチャンスなのですが、神に対する憎しみのためにこのチャンスを無駄にしてしまう可能性が高いのです。この場合は、特に苦しみが生じるときに、水を与えられない花が太陽の光によって焼かれて枯れてしまうように、この人の愛が段々と弱くなつて、やがて完全に死んでしまうことがあります。

ります。神が眞の愛の唯一の源ですので、水なしには造花しか「咲かす」ことができないように、神から離れたら、偽りの愛に生きることしかできないのです。

参照：ヨハ 8,48-95 ; ルカ 23,13-25; ヤコ 4,1-3

## 人間が神の愛を見出せない理由

「空模様を見分ける」とは知っているのに、時代のしるしは見ることができないのか。」マタ 16,3

知恵の書には、次の言葉が書かれています。「あなたは存在するものすべてを愛し、お造りになつたものを何一つ嫌われない。憎んでおられるのなら、造られなかつたはずだ。あなたがお望みにならないのに存続し、あなたが呼び出されないのに存在するもの

が果たしてあるだろうか。命を愛される主よ、すべてはあなたのもの、あなたはすべてをいとおしまれる。」（知 11,24-26）神は無限の仕方によつて、私たちに対するご自分の愛を表わしてくださいっています。上の知恵の書の言葉によると、私たちの存在そのものが神の愛の確かに表現になつています。また、私たちの生活の場として神が創造し、私たちに与えてくださつた世界も神の愛を現しています。私たちを養うために、また、私たちが成長し充実した人生、最高に幸せな人生を送ることができるため、神が私たちに絶えず与えてくださる色々な賜物や導きも、神の愛の表れになつています。神は色々な人をとおして、特に神の愛を知るようになり、この愛を受け入れた人によつて、ご自分の愛を現しています。言うまでもなく、神の愛を最も完全に現してくださいましたのは、神の子であり、神の心に適う人間であるイエス・キリストなのです。

神はご自分の愛を表すために、それほどにもたくさんのしるしを与えてくださつているにもかかわらず、残念ながら殆どの人々が、このしるしを見分けることができず、神の愛を知らずに生きています。人々が神の愛を見出せない理由はたくさんありますが、神についての間違つた考え方や、神に関する間違つたイメージをもつこと以外に、一つ

の大きな理由というのは、人間が神の賜物に慣れてしまつて、それを愛の表現として考えなくなつてしまふということです。たとえば、自分が生きているということにあまりにも慣れ過ぎると、生きていることは当然のことになります。そして、自分の命は神の愛を現わす、神がくださった賜物ではなく、自分自身のもの、他のものと同じように自分が所有しているものであると考えるようになります。このように考えている人は、命を与えてくださつた神に感謝しつつ、その導きを有り難く受け入れて神の意向に従つて生きる代わりに、この命を勝手に使う権利が自分にあると思い込んで、命の与え主である神を無視するか、正しい生き方を指示してくださる神に対して怒ることさえあるのです。

全能の神を信じる人が神に愛されていないように感じる、もう一つの大きな理由があります。それは、神が人間の望み通りには働いておられないことと、人間のすべての頼みに応じてくださらないことなのです。というのは、多くの人々が自分を愛してくれる人は、必ず自分のあらゆる期待を満たしてくれると思つてゐるがゆえに、誰かが自分の期待を満たさないと、その人は自分を愛していないように感じてしまうからです。神が

私たちを愛しておられるというのは、私たちの善のみを求めて、良いものだけを与えてくださるということですので、私たちが神に頼むものが私たちにとつて本当に善であるのでなければ、私たちがいくらしつこく頼んでも、いくら神を脅しても、神が絶対にそれを与えてくださることはないのです。その場合、神の断りそのものが、実際に神の愛のしるしなのですが、以上のように考えている人にとって、それは逆に神が愛してくれさらない証拠になつていています。

受肉された神のみことば、つまり神の最も完全な自己表現であるイエス・キリストは、(二)自分の言葉と行いだけではなく、自分の苦しみと死によつても、神の本質であるその愛を現しています。これから、イエスの生涯、特にイエスの受難、死と復活において実現された、神の愛の啓示を読み取ることを試みてみたいと思います。

参照：マコ 8,17-21； マハ 6,24-26

## 神の愛の啓示

### 神の姿であるイエス・キリスト

「神は、かつて預言者たちによつて、多くのかたちで、また多くのしかたで先祖に語られたが、この終わりの時代には、御子によつてわたしたちに語られました。：御子は、神の栄光の反映であり、神の本質の完全な現れであつて、万物を御自分の力ある言葉によつて支えておられます。」  
ヘブ 1,1-3

神が人間を創造されたのは、人間が愛によつて神と結ばれて、神と一つになるためでするので、神は最初から人間の心にご自分に対する愛を起こそうとして、ご自分自身がどんな方であるかということを、また人間をどれほど愛しておられるかということを、色々な仕方によつて現しておられたわけです。最終的に、人間が神のこととなるべく正

しく理解し、なるべく自然に神の愛に応えることができるようになると、神は私たちが考えられない、想像もつかないことをなさいました。それは何かというと、神がイエス・キリストにおいて、御自ら人間になつてくださつたということなのです。

父である神と同じ神性をもち、父である神と等しい方である神の御独り子は、眞の人間になり、人間性のすべての限界を受け入れたにもかかわらず、神の御心に適うように生き、与えられた使命を完全に果たし、最後までその愛に忠実に生きたがゆえに、目に見えない神の本質を完全に現わすことができたのです。こうしてイエスは、人間的な方法によつて、すなわち人間としてのご自分の言葉と行い、また、ご自分の受難、死と復活によつて、神の愛を現してくださつたわけですので、神の愛の受肉、つまり目に見えない神の愛が、目に見える形になつたということまで言えると思います。従つて、イエスと出会う人は、父である神と出会います。イエスご自身とその愛を知る人は、神ご自身とその愛を知ります。イエスを愛して、イエスと繋がる人は、父である神を愛し、父である神と繋がるのであります。

「イエスは言われた。「フイリポ、こんなに長い間一緒にいるのに、わたくしが分かつていなか。わたしを見た者は、父を見たのだ。なぜ、『私たちに御父をお示しください』と言うのか。」ヨハ 14,9

イエスが神の本質を現してくださつたと信じる人でさえ、時にイエスの同時代のユダヤ人と同じような間違いを繰り返すことがあります。すなわち、この人々はイエスと出会う前にもつっていた、神についての個人的な考え方やイメージをもつてイエスに近づき、そのような人間的な考えをイエスの言葉や行いによつて裏付けようとしています。この人々は、イエスにおいて自分の考えに合うようなところを見出せば、それを神の啓示として認めますが、自分の考えに合わないところは無視するか、それを神の本質と何の関係もない、ただイエスの人間的な次元として考えます。私たちは、イエスにおいて実現された啓示を正しく読み取り、真の神がどんな方であるかということを知りたい

ならば、先ず色々な人間的な考え方や先入観を捨てて、イエスのすべての言葉、行いや振る舞い、また人間にに対する態度や感情などを、神の愛の啓示として認めた上で、開かれた心をもつて、つまり今までもつていた考えに合わない教えも受け入れる覚悟をもつて、素直にイエスの姿をありのまま見つめる必要があると思います。

私たちは、以上のようにイエスを見つめることができるならば、イエスが現してくださいる神の「姿」に驚かされるにちがいないと思います。この神の「姿」は私たちの最も素晴らしい想像を超えていて、この神を信じるのは難しいかもしませんが、この神だけが生きておられるし、この神だけが私たちを救うことのできる方なのです。

イエスはご自分の教えと病人の治癒、悪霊や罪からの解放、死者のよみがえりなどのようなことを含む働きによって、多くの人々の考え方逆らって、神が人間に苦しみを与えないし、人間に苦しみを求めるのを現しました。それから、神が人間の苦しみに対しても無関心ではないこと、逆に、苦しむ人といつも一緒におられ、彼らを支え、人間に真の善を与え、あらゆる苦しみの最終的な原因である悪から解放するために、絶えず働いておられることを現わしてくださいました。

神が私たちを愛しておられるがゆえに、私たちのために真の善のみを求め、ただそれだけを与えてくださいますが、残念ながら多くの場合に人々は神の賜物を受け入れず、その与え主と共にそれを拒みます。このような事実こそが、キリストの受難において表されています。幸いにも、そのような人間の愚かで自己破滅的な行為は、神の救いの計画を滅ぼすことができなかつただけではなく、神はそれを「自分の愛をより完全に現すために、救いの計画をもつと素晴らしい実現するために用いてくださいました。こうして、キリストの受難と死は、神が苦しむ人と共に苦しむことを、また、私たちの罪がどれほど神を傷つけ、どれほど大きな苦しみを神に与えるかということを、現すものになつたのです。

参照：ヨハ 8,31-42; 17,20-26

## ゲッセマネの園・誠実な神の苦しみ

「わたしたちが誠実でなくとも、キリストは常に真実であられる。キリストは御自身を否むことができないからである。」 ハテモ 2.13

神が人間を創られたのは、人間を愛するため、すなわち人間とご自分の愛を、ご自分の命を、ご自分のすべてのものを、最終的にご自身を分かち合うためなのです。人間が神に関して無関心であつたとしても、神の愛を拒んでも、神はご自分を欺くことがありますので、この人間を愛し続けます。イエスはイスカリオテのユダによつて裏切られても、彼を友と呼び、実際に彼のことを友として考え続け、愛し続けました。それと同じように、人間が神を裏切つても、神は人間を愛し続けるわけです。

神の愛にあまりにも慣れてしまつた人たちにとって、神が人間への愛に忠実であることは、当然で当たり前のように見えても、また、神が人間の罪を赦すことは、自然で簡単にできるように見えても、神の忠実さは、決して当然でもなければ、簡単なことでありません。旧約聖書の洪水の話しが示しているように、神の望みに従つて互いに愛

し合う代わりに、憎み合い、傷つけ合う人間の姿を見ることが、神にとつて大きな苦しみとなっています。ですから、この世界を滅ぼすことや、人間にに対する愛を諦めることが、少なくとも、人間がもはや悪を行うことができないよう人に間の自由意志を奪い取ることは、合理的な解決に見えるかもしれません。実は、この世界に満ちあふれる悪と苦しめの大きさを見て多くの人は、この世界が創造されない方が良かつたと思うようです。個人のレベルにおいては、自殺とか安楽死とか人工妊娠中絶など、社会のレベルでは、強制収容所とかホロコーストとか民族浄化などが、このような考え方を表しています。けれども、神にとって、存在しているすべてのものが大切であり、すべての人々が存在する価値があるだけではなく、愛する価値もあるのです。この愛のゆえにこそ、神は一人ひとりのためにも、全世界のためにも大きな希望、大きな夢をもつておられます。神はご自分でお創りになつた世界を滅ぼすのではなく、この世界に対するご自分の望み、ご自分のこの夢の実現のために絶えず働いておられますので、神の「手」の中でこの望みと夢は、全世界の救いの計画になつてているのです。

ゲツセマネの園で、血の汗を流すほど大きな恐れと苦しみを感じても、父である神へ

の忠実さ、神の愛の計画への忠実さを最終的に選んだイエスの姿は、父である神にとつて、愛し続けることがどれほど苦しいことであるかを現しています。人間にに対する愛のために、神がそれほど苦しんでおられるにも関わらず、神は私たちを忠実に愛し続けてくださっているのだとやえ言えると思います。

参考：創 6,11-13; 8,21; 知 11,23-25; 知 12,2 .. ベザ 43,18-25

## 人間によつて裁かれる神

### ヨブの裁きに対する神の反応

「ヨブは立ち上がり、衣を裂き、髪をそり落とし、地にひれ伏して言つた。『わたしは裸で母の胎を出た。裸でそこに帰ろう。主は与え、主は奪う。主の御名はほめたたえられよ。』」のような時にも、ヨブは神を非難

する」となく、罪を犯さなかつた。」ヨブ 1,20-22

ヨブは、今まで一番大事にしていたすべてのものを失つた後、せめて神が正しい方であるという自分の信仰を失わないように一生懸命に努力していました。ヨブの友達は、この悲惨な体験を神が与えてくださつた罰として認めるように誘いましたが、ヨブは一度も罪を犯さなかつたという確信をもつていたので、このような考え方を退けました。自分の苦しみの原因について考えたヨブは、今まで楽しんでいたすべてのものが、「自分の自由意志に基づいて神が無償で彼にくださつた賜物であつた」という事実に気が付きました。そして、もし、神がそのようなものをヨブに自由に無償で与えてくださつたならば、神はそれを「自由にいつでも取り上げる権利がある」という結論を出しました。ヨブは、そのような考え方によつて、神の正しさを守ることができたと思いました。けれども、神は決してこの結論を好んだのではなく、逆にヨブに対して大きな怒りを抱いたのです。

確かにヨブは、神の正しさを守ることを目指しましたが、そんなつもりがなくても実

際にヨブの結論は、神がヨブの不幸の原因であり、神が彼に對して惡を行つたという訴えになつたのです。この訴えに応えて、神はヨブのところに来られ、ヨブが神と比べれば無に等しい存在であり、彼に神がなさることを正しく理解する能力がないがゆえに、神を裁く権利もないことをお示しになつたのです。

参照：ヨブ 10, 2-3

「あなたのことを、耳にしてはおりました。しかし今、この目であなたを仰ぎ見ます。それゆえ、わたしは塵と灰の上に伏し／自分を退け、悔い改めます。」 ヨブ 42:5-6

神と直接出会つた後にヨブは、今まで神を正しく知らなかつたので、神について語つたことが間違つていたことを認めました。自分の過ちを認めてから、ヨブは謙そんして、神に対する不正な裁きとなつた自分の言葉をすべて取り消したのです。

ヨブは神に関する不正な裁きを行い、間違った結論を出しても、何かの罰を与えられたのではなく、逆に、友達が提案した簡単な解決を退けて、自分なりに力を尽くして、神がなさることを正しく理解しようとしたヨブの努力が報われたのです。つまりヨブは、直接神と出会う恵みと神の偉大さを知る恵みを与えられて、さらに、失ったすべてのものも戻されたということでした。

この物語が私たちに教えるのは、私たちが自分の苦しみの原因を知らないときに、あまり簡単な答えで満足したりしてはいけないということ、また、神が私たちの苦しみの原因であると決して考えてはいけないということなのです。言い換えれば、自分の苦しみの原因を探しているときには、神が私たちに不幸をもたらすようなことは絶対にならないという事実を、大前提として認めなければならないということなのです。

「イエスはお答えになつた。「第一の捷は、これである。『イスラエルよ、聞け、私たちの神である主は、唯一の主である。心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』」

マコ 12,29-30

人間は神によつて、または神に向けて創造されています。神の命にあずかること、つまり愛によつて神と結ばれることこそ、人生の目的であり、人間にとつて最高の幸福なのです。聖アウグスチヌスが言つたように、「主よ、あなたは私たちを、ご自分に向けてお造りになりました。ですから、私たちの心は、あなたのうちに憩うまで、安らぎを得ることができないのです。」(告白 I, 1, 1) 神は全ての人を愛し、一人ひとりのために完全な幸福を求めておられます。ですから、人間の外面向的な振る舞いというよりも、人間の心の動きを神は見ておられます。言い換えれば、神が求めておられるのは、人間が神を恐れて、奴隸のように口をつぐんで聞き従うことではなく、人間が神を愛するようになって、神と一つの心になることなのです。

人間の心の中に神に対する愛を起し、人間を「自分のもとに引き寄せるために、神

はすべての人々、特に神を不正に訴えて神が悪を行つていて、自分たちの不幸の原因であると言つている人々や、神が人間の苦しみに關して無関心である、それとも無力であると言つている人々と、対話ををしておられます。神はそのような訴えに応えて、人間の不幸が神の働きの結果ではないこと、つまり神が「無罪」であることを示すために、「」自分が何の悪も行わないし、人間に害を与えないだけではなく、かえつて「」自分自身が、静かに人間の手から色々な苦しみを受けていることを示してください。イエス・キリストこそ、「」自分の「無罪」を現す神の決定的な応えなのです。十字架に付けられたイエスは、傷つけられ苦しんでいる神の愛を最も完全に現したために、人々を神のもとへ最も力強く引き寄せているわけです。

参照：1 ム 8,6; 1 ハ 2,4; マ 6,44; マ 12,32

## 傷つけられた神の愛

「打とうとする者には背中をまかせ／ひげを抜こうとする者には頬をまかせた。顔を隠さずに、嘲りと唾を受けた。」イザ 50,6

愛する人に無視されるときや、自分の愛が悪用されたり裏切られたりするときには人間は非常に深く傷つけられます。愛が深ければ深いほど、この人の苦しみは大きくなります。全ての人を無限に愛しておられる神、愛そのものである神は、殆どの人々によつて無視されていますし、多くの人が、自分たちの自己中心的な計画を実現するために、神の愛を利用しようとしています。また、神の愛が度々裏切られることもあります。そのような人間の振舞いは、どれほど神を傷つけているのでしょうか。そのような人間のせいで、神はどんなに苦しんでいるのでしょうか。このことが分かるためには、十字架上のイエスの姿を見つめる以外に方法はないでしよう。なぜなら、十字架上で血だらけ、傷だらけのイエスの姿は、人間の無関心や他の罪などによつて神がどれほど傷つけられているか、どれほど苦しんでいるかということを、一番はつきりと現しているからです。

イエス・キリストは、誰も想像できないほどの残酷な拷問を受けました。それでも、イエスの受難は、時間においても、酷さにおいても限られたものでした。人類の歴史の中でイエスよりも長く苦しみ、イエスよりも大きな肉体的な痛みを体験した人がいたと考えられます。それにもかかわらず、イエスのこの有限な苦しみを完全に知ることはできないでしょう。イエスの肉体的な苦しみを知る程度は、その時代の拷問の方法に関する知識や、個人の創造力と感受性によるものなのです。それから、肉体的な苦しみよりも、精神的な苦しみや靈的な苦しみを知ることの方が遥かに難しいことでしょう。このような内面的な苦しみを知ることは、イエスを愛する人、この愛によつてイエスと内面的に結ばれ、イエスの心の動きを感じ取ることのできる人にだけ許されています。ですから、イエスの心の苦しみを知る程度は、イエスに対する愛の深さによると言えるわけです。けれども、啓示の肝心なところは、イエスの苦しみの大きさではなく、イエスの愛の大きさであること、危険な時にもご自分を苦しみや死から救うために人間から逃げることを許さなかつた、この愛の偉大さであるということを忘れてはいけないのです。確かに、人間であつたイエス・キリストの有限な受難は、神ご自身の受難を完全には

現すことができません。けれども、この受難は神の苦しみと神の傷つけられている愛を知るための最も完全な手段であるし、人間が神の愛に引き寄せられ、神に関して自分の心を開くために、神の愛を十分に現すものなのです。この偉大な恵みを無駄にしないよう、私たちはイエスの受難をよく默想し、それを益々よく知り、理解するように努力する必要があると思います。特に大事なのは、私たちがイエスの受難にあづからせていてただく恵みを願うことです。なぜなら、私たちは、イエスの受難について理解を深めることによって、神の愛の神秘を益々深く知ることができます、キリストの受難を体験することによって私たちの心が変えられ、父である神とその御独り子であるイエスに対する愛が深められ、強められるからです。

イエスの受難は、数時間続いた後に終わりましたし、歴史において一回限り起つたことなのです。けれども、イエスが現した神の受難は、人間が初めて罪を犯したときから今に至るまで続いていて、人間が罪を犯し続け、苦しむ限りさらになお続きます。その意味で、およそ 2000 年前に起こったイエスの受難は、私たちの時代と何の関係もない過去のものではありません。イエスの受難は、私たち自身の無関心や犯している罪に

よる、神の現在の受難を現すのです。ですから、神がどうして「自分の苦しみを私たちに示してくださつているか、そして、この啓示によつて何を呼びかけてくださつているか」ということを理解するのは、現代に生きている私たちにとつても非常に重要なことになるわけですので、これから、神が「自分の受難を現してくださつた理由について、考えてみたいと思います。

### なぜ神が「自分の苦しみを表してくださつたのでしょうか

「イエスは婦人たちの方を振り向いて言われた。『エルサレムの娘たち、わたしのために泣くな。むしろ、自分と自分の子どもたちのために泣け。』」  
ルカ 23,28

参照：イザ 52,13-53,12; マ へ 19,28

十字架上のキリストの姿を見て、違和感を感じる人がいるでしょうが、イエスが可哀そだと思い、哀れみを感じる人も非常に多いのではないかと思います。苦難を受けて、それだけ惨めな姿になつたイエスをとおして、神はご自分に対する私たちの哀れみを乞い、ご自分の苦しみを和らげるために、罪を犯すのを止めるように私たちを促しているように見えるかもしません。けれども、完全な愛の神秘を少しでも知るようになれば、神がご自分の苦しみを表してくださつたのは、そのためではないということが分かるはずです。考えてみれば、自分を哀れむように呼びかけ、自分の苦しみを和らげてほしい人は、別に悪いことをしているわけではないのですが、他人のことを考えずに、自分のための益を求めているのです。けれども、本当に愛する人は、イエス・キリストが示してくださいました通りに、苦しみの中であつても自己中心的になることなく、相手のことを考え相手のために善を求めるものです。

以前に述べたことですが、愛する人は自分の愛が無視されているときや、拒否されているときに、また、この愛が悪用されたり、裏切られたりするときに、苦します。

この苦しみの理由について、これから考えてみたいと思います。というのは、受け入れられないことや、裏切られること、また、私たちの望みに適わない他人の振る舞いは、愛する人にとってだけではなく、愛さない人、自己中心的で、自分の益のみを求めている人にとっても苦しみの源となりえるし、実際に多くの人の場合にそうなっているからです。愛する人が苦しむ理由と自己中心的な人が苦しむ理由の違いを理解することは、神の苦しみの原因、または、神がご自分の苦しみを私たちに表してくださった理由や目的を、よりよく理解することを助けるはずです。

自分を中心にして生き、何よりも自分自身の幸福に関心をもつてている人は、基本的に回りにあるものや他の人をできる限り利用して、自分の欲望や欲求を満たそうとしています。このような人にとっては、他人に対する自分の期待や要求が、相手の行動を裁く基準になっています。他の人が客観的に善を行うか、悪を行うかには関係なしに、相手が期待通りに振る舞って、自分の欲望や欲求が満たされているときには、自分は喜びを感じて、相手の振る舞いを評価しますが、逆に自分の期待通りにならないときは、がっかりして苦しみ、相手を批判します。自己中心的に生きる人と違って、他の人を愛し

ている人は、何よりも他の人のために善を求めていきますので、この人が用いる基準とは、自分の個人的な欲求や望みではなく、愛する相手の人の善なのです。ですから、自分が愛している人が善を行っているとき、たとえそれが自分の思い通りでなくとも、また、自分の利益にならないばかりか、自分の損にすらなつても、この人は喜んでいます。そして、自分が愛している相手が悪を行うならば、悲しくなり、苦しみます。

人間はよく勘違いする存在ですので、善意をもつてしても、その判断が間違つていることがあるわけです。ですから、自分が愛している人は悪を行っていると思つても、実際にその相手の行為は善である可能性があります。そのとき、自分が愛している人の行いや客観的に起こっている事柄ではなく、自分の勘違いが苦しみの原因となるのです。けれども、人間は間違うことがあつても、神は絶対に間違うことがありません。私たちにとって何が善であるか、何が悪であるかということを、神は間違いなく知つておられるのです。ですから、もし、私たちを愛しておられる神が私たちのために苦しんでおらるるのであれば、それは私たちが本当の悪を行っているから、それとも、本当に害を受けているからに他なりません。

もし、ご自分の苦しみを表すことによつて神が、私たちの哀れみを呼び求めておられるならば、それは、ご自分のための哀れみではなく、私たち自身のための哀れみなのです。この世に存在している悪は、最終的に人間が神との愛の絆を破つて、自分勝手に生きるようになつたことに由来します。私たちが体験している具体的な苦しみは、誰かの悪意から来る行為の結果であることもあるでしょうが、多くの場合、それは私たち自身や他の人が善意をもつてしても、誰かに騙されたりして、あるいは自分の無知のゆえに、誤った選択をしたためです。その意味で、神の苦しみには、人間の悪意のみならず、私たちの無知や限界や愚かさが反映されているということが言えるわけです。私たちが行つている最も大きな悪で、私たちに最も大きな害を与えているのは、私たちが最も必要としているもの、心の奥底で最も強く求めているもの、つまり外ならぬ神の愛を、拒むことなのです。神が苦しんでいるご自分の愛を表すことによつて、私たちに回心するように、また神の愛を受け入れるように呼びかけておられるのは、ご自分の苦しみを和らげるためではなく、私たちの苦しみを和らげるためなのです。私たちが神の愛を受け入れない限り、全能者である神でさえ、私たちを愛し私たちの善を求めて、私

たちを助けることができませんから、私たちは絶えず苦しむことになります。最悪の場合には、私たちが神との縁を完全に決定的に切ることによって、自分たちを永遠に続く靈的な死、つまり終わりのない絶望といつまでも消えない孤独に決定づけてしまう可能性があります。

誰かを本当に愛している人ならば、この人のために苦しむことができるだけではなく、愛する人を悲しませないために自分の苦しみを隠しているものではないでしょうか。それがもし、この苦しみを表すことにするならば、それは最終的な場合だけです。つまり、それは愛されている人が頑固に真の善を拒みつけ、この人を助ける他の試みがすべて失敗に終わり、この人が益々善から離れていく最後の場合なのです。

神の愛がどれほど傷ついているか、神ご自身がどれほど苦しんでおられるか、ということを神が表すのは、神の無罪を示すに至る最後の論拠なのです。要するに、神は、多くの人が考へてているように人間に不幸をもたらすようなことをなさるどころか、神は私たちのために善のみを求め、私たちのためになるなら、あらゆる苦しみを受け入れる覚悟をもち、実際に想像もつかないほど大きな苦しみを受け入れておられるほど私たち

を愛しておられるということなのです。神の苦しみの大きさが、私たち一人ひとりと愛によつて結ばれたいという神の望みの大きさを表しています。人間が愛によつて神と結ばれることは、神が必要としているのではなく、私たちが何よりも必要としていることなのです。なぜなら、完全な愛によつて神と一つになることは、私たちにとつて最善であり、最高の幸福であるからです。

十字架に付けられている御子は、私たち一人ひとりに向けられている非常に強い呼びかけの叫びそのものなのです。十字架上からイエスは、私たちが自分の過ちに気付くようになると、神を裁くのを止めて神に信頼するようにと、または、回心して神が与えてくださっている愛を受け入れるようにと呼びかけています。これは神ご自身の叫び声です。この声は、時間や空間を超えて、昔と同じように今日も力強く響いているのです。

## 和解への招き

「そのとき、イエスは言われた。『父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです。』」 ルカ 23,34

神はいつも「自分の決断や選択に忠実であられますので、人間が神の愛の招きを拒否することにしても、この愛を伝えるために来られた御子を殺すことにも、人間に一度お与えになつた自由意志を奪い取るようなことは絶対になさいません。神は、自由意志に基づく人間の選択を尊重し、間違つた選択をした人間を罰することなく、逆に、この人の上にもつと大きな慈しみを注いでくださいます。

神の愛は揺るぐことのないものですので、イエス・キリストを十字架に付けるほど大きな暗闇にある人を、神は諦めませんでした。「自分を十字架に付けた人のために赦しを願い求めるイエスは、神自身の望みを現しています。実は、イエス・キリストによつて神は、罪を犯した人が赦しを願う前に、一人ひとりの罪人に向かつて「手を差し伸べて」、和解へと招いておられます。それゆえに、私たちが罪を犯した後に、神と和解するために何か特別なことをする」とによつて、私たちに対する神の態度を変えてい

ただけるように、例えは、怒りを抑えていたくように、それとも、復讐や罰をやめていたくように、何か特殊なことをする必要が私たちにはありません。私たちの罪が赦され、私たちが神と和解するためには、私たちに向かって「差し出されている神の手を握つて」、神のいつくしみ深い愛を受け入れるだけで十分なのです。

十字架上からイエスは、大きな苦しみによつてではなく、それだけ大きな苦しみをもたらした不正と罪に対しても変わることのない偉大な愛によつて、人々をいつくしみ深い父である神のもとに引き寄せて、神との和解へと招いてくださるのであります。

## 復活・悪と死より強い神の啓示

「罪が増したところには、恵みはなおいつそう満ちあふれました。こう

参照：2コリ5,19

して、罪が死によつて支配していたように、恵みも義によつて支配しつつ、わたしたちの主イエス・キリストをとおして永遠の命に導くのです。」

ロマ 5:20-21

人々がイエス・キリストを十字架に付けて殺してしまつたことは、人類の歴史において人間が犯した最も恐ろしい罪、最も大きな悪でした。しかし、父である神は、御子の苦しみと死をとおして、すべての人に対するご自分の愛と神ご自身を、最も完全に現してくださいました。十字架に付けられているイエス・キリストは、人間を神のもとへ引き寄せる最も大きな力となりました。こうして神は、最も大きな悪を最も大きな善のために利用し、最も大きな罪を最も大きな祝福に変え、キリストが辱められたことをキリストが高められたことに、神の愛と神ご自身が人間によつて拒否されたことを人間の救いに、変えてくださつたのです。

この世において、神の望みに適わないことがたくさん起つていますので、神は残酷な惡に対しても無力であるような印象を受けることがあるでしょう。けれども、実際に、

父である神がこの世の真の支配者であり、神には創造のわざを最初から求めていた目的に導き通す力があります。神が無力であるように見えるのは、神の支配の仕方が、私たちが自分の経験から知っている支配の仕方と異なっているからです。この世の支配者と違つて、神は絶対に暴力を用いることなく、一人ひとりの自由意志を尊重しておられます。神の唯一の力というのは、忍耐強くて誠実な愛なのです。多くの場合に苦しみは、人間を麻痺状態に落としてしまいか、自分の望みに逆らう行動をさせてしまうか、それとも他の人との関係やこの人自身を完全に滅ぼしてしまいます。けれども神の場合には、それとは違います。神は絶対に苦しみに左右されることなどありません。人が神に逆らうことによって神が苦しむようになつても、神はこの人を愛し続けるし、この人のために善を行い続けます。神はご自分に、より大きな苦しみを与えた人に、より大きな愛を注ぎます。人間の振る舞いしかえることのできない暴力と違つて、この神の愛には人間の心を変える力、人間丸ごと全体を変える力があるのです。

イエスの復活が私たちに現しているのは、神の救いの計画を滅ぼすことのできるような悪や罪はないということ、さらに、神には悪を善のために利用する力、ご自分に逆

らう力をご自分の計画をもつと素晴らしい実現するために、役立たせる力があるとうことなのです。

復活されたキリストの体には、傷跡がありました。この傷跡が私たちに示しているのは、神が人間の罪を忘れるとはありませんし、この罪によつて負わされた傷も忘れることはないとということなのです。けれども、この傷は治癒に向かいます。そして、傷跡を見ることは、それを負わせた人に対する神の怒りや復讐心を起こすのではなく、逆に、この人に対する神の慈しみを深め、この人の罪が現した弱いところで神はこの人を、もつと強く支えなければならないという思いを起こします。

悪の支配が世界に広がつて、全世界が滅びに向かつているように見えて、最終的に神が自分の救いの計画、つまりイエスの一番大きな希望となつていた神の国を、必ず実現されるということは、キリストの復活によつて保証されていると言えます。実は、イエスの復活と昇天によつて、私たちが神に近づくことは可能になつていますし、今現在、神の命にあずかり、神の愛に生きることができます。言い換えれば、神の国が完成され、栄光と力をもつて到来する前に、私たちは神の国の市民となり、イエスと同じよ

うに愛に生きる」とによつて、この神の国の素晴らしさを他の人に表わす「とがでかい」ということなのです。

参照：ロマ 8,26-30

# 人間の癒し

## 最大の贈り物

「友のために自分の命を捨てる」と、これ以上に大きな愛はない。」ヨハ

15,13

イエス・キリストを十字架に付けて殺してしまった人々は、それによつて自分たちが、イエスよりも力強いものであることを示したと思つていたことでしょう。けれども、イエスは、決して権力者の不正な企みの、単なる無力な犠牲者ではありませんでした。実際に、イエスがご自分を彼らの手に引き渡さず、このような残酷な拷問を許さなかつたならば、彼らは自分の計略を実現することはできず、イエスに何の害も与えることはできませんでした。最後の晩餐の席でイエスが強調されたように、誰もイエスから命を奪い取ることはできませんでした。要するに、イエスが苦しみ、亡くなつたのは、外な

らぬイエスご自身が自由に自分の命をささげたからなのです。

イエスは、無償で献身的な奉仕によつて、人々に対するご自分の愛を示していましたが、正にご自身を罪人の手に引き渡したことによつて、最も大きな愛を表現しました。確かに、イエスが十字架に付けられて殺されたことは、神の望みに逆らう人々の罪でしたが、キリストは自分自身を自由にささげたことによつて、この罪を奉獻に、つまり神への最も大きな贈り物に変えたのです。それはイエスがすべての人々のために、父である神に与えた自分自身の命という、最高の価値ある贈り物でした。

このような行動によつて、イエスは私たちに非常に大切なことを教えています。それは、イエスによる完全な愛への招きといふのは、自分の命を他の人のための贈り物とすることによつて、それを神ご自身のための贈り物にすること、神のための捧げ物にすることへの呼びかけであるということなのです。人間は他の人のために生きているときだけ、言い換えれば、自分の人生が誰かのための贈り物になつてゐるときだけ、愛に生きしていく、人間らしく生きています。眞の愛とは、隣人に奉仕することによつて、つまり他の人の善のために自分自身を「削る」ことによつて、成長し成熟する愛なのです。

参照：ヨハ 10,1-18 … ヨハ 12,24-25

## 世の罪を取り除く神の小羊

「ヨハネは、自分の方へイエスが来られるのを見て言った。『見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ。』」 ヨハ 1,29

洗礼者ヨハネはイエスを、「世の罪を取り除く神の小羊」として紹介しました。この象徴的な表現の意味を理解し、「自分の使命を果たすことによってキリストが成し遂げられたことが分かるためには、ユダヤ人たちが神にさやげていた、いけにえの意義を理解する必要があると思います。

ユダヤ人たちは人間だけではなく、動物を殺すことでも、「殺してはいけない」という

捷に逆らうものとして、悪であると考えていました。彼らは命の与え主である神のみが、命を取り上げる権利をもつておられると確信していました。ですから、人間が他の生き物の命を奪うときに、神の権利を自分のものにして、自分を神の立場に置くことになるので、それによつてこの人は最も大きな罪を犯し、神との絆を破ると理解していました。けれども、同時に遊牧民でもあつたイスラエル人にとって、彼らが飼っていた羊を殺すことは、生きるためにどうしても必要なことでした。ですから、彼らにとって動物を殺すこととは、大きな問題になつていていたのです。それはすなわち、生きるためには、罪を犯し、命の源である神との絆を破らなければならないという問題でした。ユダヤ人たちはこの問題を、自分たちが殺した動物の血を神にささげることによつて解決していました。というのは、ユダヤ人にとっては血が命そのものでしたので、この血を神にささげることによつて、神を命の主として認めた上で、罪によつて破れた絆を直したい、再び神との正しい関係に戻りたいという、自分たちの望みを表わしていました。殺された動物の血を神にささげることによつて、ユダヤ人たちは自分の行動の性格を変えていたわけです。つまり、動物の命を奪い取るという罪を、和解のいけにえに変えたということです。

このいにえを必要としたのは、神ではなく人間でした。なぜなら、神は罪を犯した人も愛し続けておられ、ご自分から離れた人間を受け入れたいといつも求めておられますし、人間が自分の罪を認め、神に赦しを願うならば、神は必ず赦してくださいますので、罪人にに対するご自分の態度を変える必要は見当たらないからです。神と人間の和解が実現されるためには、人間が罪に対する自分の態度、また神に対する態度を変えなければならぬのです。ユダヤ人たちは、動物の血を神に捧げるという儀式をとおして、自分の罪を認め、赦しを願つたわけですから、彼らの罪は赦され、神との正しい関係にもどることができたわけです。

このようなユダヤ人たちの信仰は、後に、動物を殺すという罪だけではなく、他の罪を赦していただき、神と和解するためにも用いられるようになりました。色々な犠牲をはらいながら貯めてきたお金を、動物を買うために使うことによつて自分の罪を償い、自分の目の前で動物が殺されたときに、この動物の頭の上に自分の手を置くことによつて、自分の罪の恐ろしい結果、つまり神以外のものに従い、罪を犯すことによつて命の源である神から自分を引き離すという結果を、ユダヤ人たちは認めました。さらに、流

された血を神に捧げることによつて、再び神を神として認めたユダヤ人たちは、罪を赦していただき、神との和解を果たしたわけです。

私たちの現実において、殆どの場合にたつた一つの悪が、もつと大きな悪をもたらします。悪いことをされたら、もつと大きな悪をやり返すことや、自分が行つた悪が誰にも知られないようにするために、更にそれよりも大きな悪を行うことがあります。それから、私たちが犯した罪は、必ず私たちの悪への傾きを強くし、善惡を識別する力を衰えさせてしまうので、私たちが神から益々遠く離れて、段々とより大きな悪をより簡単に行うようになつてしまふこともあります。神の愛を現すために、また私たちに神の命を与えるために来られた、神の子イエス・キリストを殺すということは、人間のもつとも厚かましい行いで、もつとも大きな悪、最も大きな罪であつて、人類の歴史の中で最も暗い瞬間でした。それと同時に、キリストの死はすべての人々が犯した罪の結果を示すものとなつています。もし、私たちが、自分の罪の責任をとらなければならなかつたとしたならば、私たちは必ず神から離れたままに、永遠に何の希望もない暗闇の中に、いつまでも生きるようになつたに違ひないと思います。けれども、神の小羊である

イエス・キリストが、「自分の血、つまり「自分の命を神にささげてください」とによつて、悪がもつと大きな悪をもたらすという悪循環を破つただけではなく、私たちのすべての罪をいけにえに変えてくださいました。イエス・キリストによる「のいけにえこそ、私たちの罪をあがない、全人類を神と和解させてくださいたわけです。

参考：1コヘ 1,29-34；使 8,30-35；黙 5,6-14

## 新しい永遠の契約

「それから、イエスはパンを取り、感謝の祈りを唱えて、それを裂き、使徒たちに与えて言われた。『これは、あなたがたのために与えられるわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい。』食事を終えてから、杯も同じようにして言われた。『この杯は、あなたがたのために流される、わたしの血による新しい契約である。』」ルカ 22,19-20

十字架上でイエスが父である神にさきげたのは、ご自分の苦しみや死ではなく、ご自分の命、ご自分自身なのです。それは、父である神への完全な愛の表現でした。同時に、イエス・キリストにおいて神は、すべての人にご自分の無限の愛をお与えになり、この愛が絶対に変わることもなければ、消えることもないということを示してくださいましたのです。イエスの愛と神の愛というこの二つの完全な愛の出会い、そしてこの愛の相互の奉獻によって、イエス・キリストが代表された全人類と神との間に、新しい永遠の契約が結ばれました。この新しい契約によって、神と人類は和解したわけですので、この契約をとおして、原罪と他のすべての罪によって人間と神との間に出来上がっていた、底のない淵が埋められたと言えます。この契約によって、今どんな人でも神に近づくこと、神との愛の交わりに生き、神と一つになることができるようになつたのです。

参考：ヘブ 10,16-18

「しかし、時が満ちると、神は、その御子を女から、しかも律法の下に生まれた者としてお遣わしになりました。それは、律法の支配下にある

者を贖い出して、わたしたちを神の子となさるためでした。あなたがたが子であることは、神が、『アッバ、父よ』と叫ぶ御子の靈を、わたしたちの心に送つてくださった事実から分かります。ですから、あなたはもはや奴隸ではなく、子です。子であれば、神によつて立てられた相続人でもあるのです。」 ガラ 4,4-7

神はこの新しい契約にあずかるすべての人に、愛そのものであり<sup>20</sup>自分の命である聖靈をお与えになることによつて、この人を<sup>21</sup>自分の子どもにしてくださいます。結果的にこの人は、神の国の市民、神の家族の一員となるわけです。

十字架上で結ばれた新しい契約によつて、例外なくあらゆる時代のすべての人々に、神の内なる命に参与する可能性が与えられると同時に、完全な癒しが与えられるのです。

参照：エフ ハ 2,19-22

## 十字架から注がれる癒し

「[イエスは、]十字架にかかるて、自らその身にわたしたちの罪を担つてくださいました。わたしたちが、罪に対して死んで、義によつて生きるようになるためです。そのお受けになつた傷によつて、あなたがたはいやされました。あなたがたは羊のようにさまよつていました。今は、魂の牧者であり、監督者である方のところへ戻つて来たのです。」1ペト

2,24-25

神は愛そのものであり、あらゆる愛の源ですので、神との正しくない関係は、人間が愛するという最も優れた能力を実現することを不可能にしますし、人間の他のすべての不幸の最終的な原因でもあるのです。それゆえに、神との正しくない関係を、人間の最も大きな問題、人間の最も重大な病気として認めることができます。魂の病と言えるこの病気は、体の病気と違つて、人間を肉体の死だけではなく靈的な死へ、一時的な苦しみだけではなく永遠に続く苦しみへと導くものなのです。

ご自分の生き方、特にご自分の受難と十字架上の死をとおして、イエスは私たちに神の真の「姿」、神の偉大な愛を現してくださいって、私たちを神に対する恐れから解放すると共に、神のもとに近づきたいという望み、神と和解し、親しい交わりの内に生きたいという望みを、私たちの心の中に起こしてくださいます。十字架上で新しい永遠の契約を結んでから、神の靈を遣わしてくださいましたことによってイエスは、すべての人々に神への道を開き、神との愛の交わりに生きる可能性を与えてくださったのです。

愛に苦しみが伴つても、その愛に忠実に生きることは、人間の強い意志によつてではなく、神ご自身の力によつて可能になります。もし、私たちがイエスと同じように、色々な体験をとおして父である神の愛を知るようになり、心を開いてこの愛を受け入れるならば、私たちは本当に神によつて愛されていると実感し、神の真の子どもであるという強い自覚をもつようになります。そのとき神の愛は、いつも私たちの内に燃えつけ、私たちの愛を燃え上がらせるようになるのです。神の愛で燃えるようになつたら、私たちは神との繋がりを保つために、またこの繋がりを深めるために、何よりも神の意志に従つて生きたいと望むようになります。さらに、私たちが神の子どもであるという

事実は、私たちの最も深いアイデンティティとなり、私たちのすべての選択や決断や振る舞いに決定的な影響を及ぼすようになりますので、私たちは神の国の到来、つまりすべての人々が愛によって神とも他の人々とも結ばれるようになつて、一つの神の家族になるという神の望みが実現されることを何よりも切に求めるようになり、そのためには身的に働くようになります。父である神の愛、それから神の子どもであるという事実と神の国のビジョンが、私たちの最も大切な宝となると同時に最も強い原動力になるとき、何も私たちを神とその愛から引き離すこととはできませんので、私たちは安心してイエスと従い、イエスと共に生きることができます。そのとき私たちは、イエスと同じようにどんな状況においても、出会う一人ひとりを愛することができるようになります。私たちの最も深い本質に沿つて生きるようになります。そのような生き方が、私たちの癒しの過程の完成の結果であるわけですので、この癒しこそ私たち一人ひとりが何よりも必要としている救いなのです。

参照: 1ヶ月 2,19-25; ロマ 8,35-39; ルカ 12,49

イエスを知ること

「永遠の命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、あなたのお遣わしになつたイエス・キリストを知ることです。」ヨハ 17,3

神に近づくことや神の愛を受け入れることは、イエスの教えを知るとかイエスをとおして行われた啓示を理解することによつてもたらされる結果ではありません。それはイエスご自身を知ることによつてもたらされる結果なのです。しかし、イエスを知るということは、決してイエスについて色々な情報を集めたり、イエスに関する色々なことを覚えたりするような、理性的な問題ではありません。イエスを知るということは、イエスご自身と出会い、イエスとの友情の関係を結ぶことなのです。確かに、イエスの生き方や教えを知るために、またその理解を深めるために、聖書つまり神の言葉を読んだり、それを默想したり、それについて勉強したりすることは、非常に重要なことです。けれども、それはイエスと出会うための準備に過ぎないものなのです。最も重要なのは、

直接イエスに向かうこと、つまり個人的な祈りと、イエスを自分の生活に受け入れることなのです。

私たちがどんな状況においてもイエスと共に親しい交わりの内に生き、それが簡単であつても難しいことであつても、いつもイエスの生き方を模範にして、イエスの教えを道するべにしながらイエスに忠実に従うならば、私たちのイエスとの絆が段々と強まり、イエスとの関係は深まっていきます。その過程の結果として、私たちはイエスと一つになり、イエスの似姿になるということなのです。

イエスを知ることは、実際に自分自身を、自分の本性を知ることなのです。そして、イエスと同じ姿になることは、私たちの父である神が私たちのために最初から求めておられた姿になること、創造主である神が創造のときに定めた目標に私たちが達することなのです。

自分の人生の目標に到達して、真の自分になること以上に大切なことがあるのでしょうか。私たちは父である神に、他の人々と全世界に、さらに自分自身に、これ以上に素晴らしい贈り物を与えることができるのでしょうか。自分自身にとつても他の誰にと

つても、何の価値もなくて幻想に過ぎない他の目標を目指すこと、そしてそのために力を尽くすことには、何の意味があるのでしようか。それは自分の力や人生そのものを、無駄にする」とではないでしょうか。

参考：ヨハ 14,6; ハイリ 3,8-11; ハハ 3,17-19; 1 マク 3,1-2; 2 ロリ 3,18

## 愛の完成へのペトロの道

イエスが選んだ十二人の使徒の一人であつたペトロの体験と彼の成長振りは、愛の完成への道を表わしています。他の聖人の生き方と同じようにペトロの生き方にも、私たち自身の道、つまり父である神が私たち一人ひとりのために整えてくださった道を歩むために、役に立つヒントを見出すことができると思います。

## イエスとの出会い

「イエスは、ガリラヤ湖のほとりを歩いておられたとき、二人の兄弟、ペトロと呼ばれるシモンとその兄弟アンデレが、湖で網を打っているのを御覧になつた。彼らは漁師だった。イエスは、『わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう』と言われた。二人はすぐに網を捨てて従つた。」マタ4,18-20

ペトロがイエスと出会う前に、どのような生活をしていたかということについては、あまり情報がありません。彼の元々の名は、シモンでした。ベトサイダの出身であつたシモンは、ヨナの息子で、彼にアンデレという名の少なくとも一人の兄弟がいました。漁師であつたシモンは結婚してから、ベトサイダからカファルナウムという町に移つて、そこに住むようになつたということも私たちには知っています。そうすると、シモンはイエスと出会うままで、他の多くの人と同じように生き、割合に安定した生活を送つていたらどうということが、言えるのではないかと思います。彼の町に住み、病人を癒したり、

悪靈を追い出したりしていたイエスについて、シモンは聞いたに違いありません。この有名な先生は、いきなり彼の家に来てくださいました。病床に伏していた姑を癒すためにシモン自身がイエスを呼んだのか、彼の友人たちがイエスを連れてきたのかということは定かではありません。もしかして、イエスは自らシモンの家に行つたのかもしれません。おそらく、シモンはそのとき初めてイエスと出会つただけではなく、初めてイエスの不思議な働きを自分の目で見ることができたのでしよう。けれども、この出会いはシモンの人生を変えることはありませんでした。その後も、カファルナウムに留まり、漁師の生活を続けていました。彼の人生には、イエスのための場所がまだありませんでした。

シモンが再びイエスと出会つたのは、ガリラヤ湖のほとりで、丁度仕事を終えようとしていたときでした。イエスはシモンに手助けを求めました。有名な先生が教えるために彼の船を使つたことは、シモンにとって大きな誇りだつたはずです。けれども、教えが終わつた後にイエスがシモンに網が破れそうになるほど多くの魚というプレゼントを与えてくださつたので、シモンはその恵みに全く相応しくない人間であると感じま

した。この経験は、文字通りに、ペトロに片ひざをつかせました。シモンはイエスが自分から速やかに離れてくださるようになると願つたほど、イエスの偉大さに対して自分が小さく感じましたし、自分の罪を意識させるイエスとの出会いには苦しい面もあつたでしょう。けれども、イエスはシモンのこのような頼みに応じませんでした。シモンを落ち着かせてから、彼の人生の決定的な変化を予告しました。おそらく、シモンはイエスの言葉の意味をはつきりと理解することができなかつたでしようが、この言葉の中に今までよりも優れた価値や意義のある人生の可能性を見出して、すべてをおいてイエスに従うこととしたのです。

参照：ルカ4,37-39；ルカ5,1-11

「イエスが言われた。『それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか。』シモン・ペトロが、『あなたはメシア、生ける神の子です』と答えた。すると、イエスはお答えになつた。『シモン・バルヨナ、あなたは幸いだ。あなたにこのことを見たのは、人間ではなく、わたしの天の父なのだ。』」マタ 16,15-17

シモンはイエスに従つた多くの弟子の中から選ばれた12人の使徒の一人になり、「君」を意味するペトロという新しい名をイエス自身から与えられました。他の使徒と同じようにペトロもイエスがメシアで、神の子であるということが最初から分かつていたではありません。この事実を知つたのは、イエスのそばに長い間いて、イエスの教えを聞いたり、イエスの行いを見たりした結果、つまりイエスの力と愛を体験した結果でありました。使徒たちは、イエスのそばに長くいればいるほど、イエスによつて益々驚かされました。特に嵐を静めるような、誰にもできない、非常に不思議なわざをなさるイ

エスの姿を見た弟子たちは戸惑い、「いったい、この方はだれだろう」（マコ 4,41）と驚嘆していたのです。

ペトロは他の使徒たちよりも早い時期に、イエスがメシアで神の子であると信じるようになつて、それを公に告白しました。確かに、そのときペトロはすでにイエスが誰であるかということを正しく認識していましたが、まだイエスを正確に知るようになつていませんでした。というのは、イエスがメシアであるということ、また神の子であるということを知つていても、ペトロがイエスに関して「メシア」と「神の子」の言葉を使つても、その言葉の意味を正しく理解していなかつたからです。そのときペトロは、他のイスラエル人と同じように、メシアが政治的な権力を得て、王としてイスラエルを支配するようになると考えていました。この間違つた考え方に基づいて、ペトロはイエスに対して色々な期待をもつていました。恐らく他の使徒と同じように、ペトロはイエスがイスラエルの王になつたら、イエスに選ばれた12人の一人として、その富や権利、また王の様々な特権に、自分もあずかるようになると思つて、そのときどのような生活を送れるかと想像したり、それを楽しみにしたりしていただでしよう。このような根拠の

ない期待が、イエスとの摩擦の原因にもなったのです。

イエスがペトロの期待と違う終わり方、すなわち、「自分の働きの終末は王になることではなく、大きな苦しみを受けた後に十字架に付けられ、殺されることである」と話し始めたため、ペトロは非常に驚きました。イエスがメシアであると信じたペトロにとってそれはありえないことで、ペトロは弟子であることを忘れて、先生であるイエスを叱つてしまつたほど受け入れがたいことでした。ペトロのこの失敗は、イエスにとつて教えるチャンスでした。マタイ 16 章の 23 節に書かれているイエスが、そのときにペトロに語つた言葉は、「引きさがれ」とか、「私から離れろ」というように翻訳されることがありますが、ギリシア語の「Ὑπαγε ὅπισθι μου」（ユパゲ・オピソ・ムー）という言葉を直訳すれば、「私の後に行きなさい」となるそうです。この言葉を語ることによつてイエスは、ペトロを退けようとしたのではなく、弟子であつたペトロのいるべき場所がイエスの前ではなく、イエスの後ろにあるということを思い起こさせようとしたのでした。つまり、イエスがペトロの想像や期待に合わせるべきなのではなく、ペトロの方が自分の間違つてゐる考え方や習慣を放棄する覚悟をもつて、先生であつたイエスの導き

に従うべきであると教えたわけです。それから、ペトロの間違いの原因は、彼が、「神のことを思はず、人間のことを思つてゐる」とあると、つまり、自分の野心や欲望に従い、根拠のない期待を満たそうとするため、神の導きに従うことや、神が彼に与えた賜物を受け入れることができなくなつてゐることであると教えました。ペトロが自分の望みに従う人、自分の感情に振り回される人から、神の望みに従う人になるためには、実際に長い時間とたくさん体験を必要としていました。

参照：マタ 14,25-31；マル 6,60-66-69；マル 16,13-26

### ペトロの愛の告白と裏切り

「友のために自分の命を捨てる」と、これ以上に大きな愛はない。」ヨハ

15,13

イエスのそばに3年間暮らし、イエスの教えを聞き、行いを見て、色々な体験をすることによってペトロは随分変わりました。最後の晩餐の最中、イエスが裏切られ、苦しめられ、殺されると話したとき、ペトロは以前のようにこの言葉に反対したのではなく、イエスと共に牢屋に入つてもいい、殺されてもいいと言うことによつて、イエスのために苦しみを受ける覚悟、さらに命を失う覚悟をしていると宣言しました。こうして、ペトロは最も偉大な愛、自分の利益ではなく相手の善を求める愛、相手との関わりがもたらすあらゆる結果を受け入れる覚悟をしている、忠実な愛を告白したわけです。

この愛の告白は、本当にペトロの心の中から流れ出たものであつて、それによつてペトロが正直に自分の気持ちを表わしたということは、疑う余地がないと思います。けれども、数時間後に、この気持ちはペトロの心の現状を正しく表わしていくなかつたということが明らかになりました。危険に直面したとき、イエスの弟子であるがゆえに、苦しめられる恐れ、もしかすると、命まで奪われる恐れを感じたペト

ロは、イエスの仲間であるという事実を否定して、その場から、と同時にイエスのもとから逃げてしましました。自分の命をイエスにさしあげたいと心から求めたペトロが自分の宣言と自分の望みに逆らって、自分の命を守ることを選択しました。この体験によってペトロは、イエスが前から知っていたこと、つまりペトロの愛がまだ十分に成熟していないため、ペトロがまだ自分の心の望みに従って生きる」ことができない」ということが、はつきりと分かりました。

ペトロのイエスに対する愛の告白は、嘘ではありませんでした。また、仲間の前で格好をつけるためのものでもありませんでした。ペトロがイエスに対する忠実な愛という完全な愛を告白したのは、自分自身のこと、特に自分の限界をまだ知らなかつたがゆえに、自分の望みと心の実際の現状を区別することができなかつたからなのです。

参考：ルカ22,31-34；マタ26,69-75

## 愛の完成

「はつきり言つておく。あなたは、若いときは、自分で帯を締めて、行きたいところへ行つていた。しかし、年をとると、両手を伸ばして、他の人に帯を締められ、行きたくないところへ連れて行かれる。」ヨハ21,18

苦しみを避けるためにイエスの仲間ではないと誓うことによつて、ペトロはイエスに対する自分の愛の限界を、または、イエスに忠実に生き、最後まで従うための力が自分にないことを、痛いほどはつきりと知りました。ペトロがイエスのように生きようと望んでも、それはまだ無理なことでしたし、イエスが行つたところへ行くことはできませんでした。ペトロにとつてイエスのそばにいることが喜びになるほど、イエスと共にずっといたいと望むほどイエスを愛していても、イエスのために苦しみを受け入れるほどには、また命を含めてすべてをささげるほどには、イエ

スを愛していないという事実を実感しました。自分の愛の弱さを知ったペトロは、自分に対してもがつかりし、イエスの模範に見倣つて、イエスの教えに基づいて生きようという努力も、またその望みも諦めて、イエスと出会う前の仕事に、つまり自信をもつてできると思ったところにもどつたわけです。

幸いに、イエスはペトロを諦めませんでした。イエスはペトロのことを、ペトロが自分自身のことを知っていたよりも、良く知っていました。ペトロの愛はまだ完全ではないが、ペトロが心から完全な愛を求めているということを知っていました。そして、ペトロが自分の現状を認めてから、イエスの力を頼りにしてイエスに従うならば、彼の愛が成長し完成されるということも知っていました。そのためこそ、復活したイエスはペトロのところに来て、愛について三回尋ねたのでした。

イエスの質問とペトロの答えの意味を正しく理解するために、福音書が元々それを用いて書かれたギリシア語のテキストを参考にする必要があります。ギリシア語原文では「愛」を表す二つの違う単語が使われています。一つは「アガペー」、もう一つは「ビリアー」という言葉です。アガペーは、イエスが十字架上で表わした愛、

ペトロが最後の晚餐の席で告白した愛、つまり相手の善を自分の都合や望みよりも大事にし、必要なら相手のために自分の命を奉獻する、完全な愛のことです。他方ピリアーは、イエスに対しペトロが實際にもつていた愛、つまり相手のことを好んで、相手の善よりも自分の利益、相手の命や相手との関係よりも自分の命を大事にする愛のことです。

イエスは一回目にペトロに尋ねたとき、「ヨハネの子シモン、この人たち以上にわたしを愛しているか」と言つて、愛を表すのにアガペーという言葉を用いました。

この質問は、最後の晚餐のペトロの告白を思い起させます。恐らくペトロの耳には、「あなたはこの前に言つたように、本当に他の人よりも私を愛しているのか。あなたは、本当に自分の命よりも私を愛しているのか。あなたは本当に、私があなたを愛しているように私を愛しているのか」と尋ねられたかのように聞こえたのではないかと思います。自分の命を守るために、それとも、苦しみを避けるために、イエスを知らないと言い、イエスの仲間であることを否定したペトロは、自分のイエスに対する愛の現状を良く知つていましたので、「はい、主よ、私があなたを愛して

いることは、あなたが「ご存じです」と答えますが、愛を表すのにアガペーではなくピリアーという言葉を使います。ペトロが自分の答えには、アガペーではなくビリアーを使うということは、実際のところ、「あなたがご存知のように、私は、あなたを完全な愛を以て愛していると思いましたが、実際にはそうではないことがよく分かりました。私は他の人と同じように、まだまだ自分の益を求めている愛、何よりも自分の命を大事にしている愛を以てあなたを愛しているだけなのです」という意味であったのでしょうか。イエスはペトロの愛がアガペーの愛ではなく、ただのビリアーの愛であるということが分かつても、ペトロに「自分の跡継ぎになつて、教会の最高指導者、最高責任者になる」という使命を与えました。それによつて、イエスがペトロを信頼してくださるのは、ペトロが完璧で、他の人よりも優れた弟子であるためではないということを、イエスは示されました。イエスが求めているのは、完璧であるというよりも、まず自分の現状を知ること、自分の限界を認めた上でイエスにのみ頼ることなのです。

二番目の対話の中には、ペトロの愛と他の弟子の愛との比較はありませんが、基

本的に最初の対話と同じもので、恐らくペトロの意識を強めることや、イエスはペトロの弱さを知っていても、本当に彼を信頼しているし、ご自分の使命にあずかってほしいということを、再確認するためのものであつたでしょう。けれども、三回目の対話には、一つ大きな変化があります。イエスは、三度目にペトロに尋ねたとき、愛を表すのに、もはやアガペーではなくピリアーを使いました。おそらく、この変化がペトロの悲しみの原因であったと思思います。もしかしてペトロは、イエスがペトロにはアガペーの愛は無理であると判断して、この完全な愛を欲求することを諦めて、ピリアーの愛で我慢することにしたというふうに理解したかもしれません。恐らく、このように考えたからこそ、ペトロが悲しくなったのでしょう。けれども、イエスはすぐにこのようなペトロの間違つた考え方を直します。そして、確かにペトロは今まで自分の好み、自分の考えや望みに従つてきましたが、これから成長して、イエスと同じように、自分の望みや恐れから自由になつて、愛する人のために自分の命をささげができるようになるのだと言いました。この言葉によつてイエスは、ペトロがご自分に従い、与えられた使命をできる限り果たすなら

ば、彼の愛が成長し、そして彼の愛は心の最も深いところで求めている愛、完全な愛になるにちがいないということを約束したわけです。ペトロの愛がこのように成熟してはじめて、ペトロが最後の晚餐の席でイエスに約束したことを探ること、つまり苦しみや命の危険に直面するときにも、イエスに忠実に生きることができるようになるのです。

イエスとペトロの対話から、次のような結論を出すことができると思います。すなわち、完全な愛は、イエスに信頼されることやイエスの使命にあずかるように招かれるこの条件ではなく、イエスの信頼に応えて、与えられた使命を果たすことこそが、完全な愛への道であるということなのです。

自分のことをありのままに知ったペトロは、復活したイエスの赦しを無条件の愛の表現として、ありがたく受け入れました。そして、イエスの約束を信じたペトロは大きな希望に満たされるようになつたのです。この希望に強められて、ペトロはイエスに再び従うようになり、イエスから与えられた使命を力の限り果たしているうちに、彼の愛が少しづつ成長しましたし、そして本当に彼の愛は完成されたので

す。

ペトロの体験が示しているように、愛の成長は、場合によって一生掛かる過程ともなるものであります。愛が成長するためには、自分自身のことをありのままに知ることやイエスを知ることが大切です。私たちは自分の現実の姿を出発点にして、イエスの生き方という模範、イエスの無条件の愛や信頼、また、大きな希望をもたらすイエスの様々な約束によつて強められ、イエスから与えられた使命を果たし、イエスのように他者に仕えることによつて、つまり自分自身の命を他者と分かち合ひ、自分の人生を奉獻することによつて、私たちの愛が成長し、完成されることになるのです。

参考：ヨハ21,15-18；1コ1,3-9

## エピローグ・全てのものに優る愛

「見よ、わたしは戸口に立つて、たたいている。だれかわたしの声を聞いて戸を開ける者があれば、わたしは中に入つてその者と共に食事をし、彼もまた、わたしと共に食事をするであろう。勝利を得る者を、わたしは自分の座に共に座らせよう。わたしが勝利を得て、わたしの父と共にその玉座に着いたのと同じように。」黙 3:20-21

一人ひとりの人生や私たちが生きている現実そのものが、苦しみに満ちていることは、誰にも説得する必要がないでしょう。誰一人、苦しみを避けることはできません。子どもも老人も、貧しい人も裕福な人も、正しい人も正しくない人も、キリスト者も、そうでない人も皆苦します。この文書を書く私も、それを読んでくださっているあなたも、苦しむことがあります。神の子であつたイエス・キリストさえも苦しんだのです。

普段、人は苦しみに対して、どんな態度をとつてているのでしょうか。人間は、正常であるならば、自然に苦しみから自分を守ろうとして、苦しみを避けるように努めます

し、また、避けることができなければ、この苦しみをなくするように、あるいは、少しでも和らげるようにするでしょう。それは本能的な振る舞いですので、それを誰にも教える必要はありません。

イエス・キリストも度々そのような態度をとっていました。イエスの活動を見つめてみれば、イエスは色々な形の苦しみと戦うために、一番長い時間をかけていたということが誰でも簡単に分かります。イエスご自身も、色々な苦しみを避けようとしていました。例えば、人々がイエスを岩から付き落とそうとしたときや石で殺そうとしたとき、イエスは逃げました。別の時には、逮捕されないように隠れたり、別の場所に移動したりしました。弟子たちにも、苦しいときには互いに助け合うように、迫害されるときには、そこから逃げるようになっていました。恐らく誰でも、そのようなイエスの振る舞いや教えは、常識的なものであると認めるのではないかと思います。

けれどもイエスは、「自分の十字架を担つてわたしに従わない者は、わたしにふさわしくない。自分の命を得ようとするとする者は、それを失い、わたしのために命を失う者は、かえつてそれを得るのである」(マタ 10,38-39)という言葉も述べました。この言葉は、

人間の本能に、またはイエス自身の教えや生き方に、矛盾していると考えても不思議ではないと思います。このような言葉によつてイエスは、弟子たちに苦しみを受け入れるよう命じるだけではなく、自分の命を守ることを禁じてさえいるように聞こえます。イエスはそのようなことを弟子たちに教えただけではなく、ご自身の人生においてもこのような態度をとる場面が見出せます。例えば、大祭司の下役がご自分を逮捕するため、ゲツセマネの園に来るということが分かつても、イエスは逃げません。ご自分を逮捕することを許すだけではなく、不正な判決を下すこと、さらに、鞭打つこと、十字架に付けて殺すことまで許し、このような不正や苦しみと死を自ら受け入れるのであります。

このように互いに矛盾しているように聞こえるイエスの教えを、どのように一貫させることができるのでしようか。このように互いに矛盾しているように見えるイエスの行動を、どのように理解すれば良いのでしょうか。

まず、命の源である神、生きているすべてのものを愛しておられる神は、人間が苦しむことや死ぬことを求めるのではなく、人間が幸せに生きることを求めておられるということは疑う余地がありませんし、それは確実なことであると言わなければなりません

ん。さらに、神はご自身が人間の命を大切にし、それを尊重するように、すべての人々が、一人ひとりの命を大切にし、それを尊重することを求めておられるということも、自信をもつて言えます。けれども、神が何よりも求めておられるのは、愛なのです。神は私たちが、神をはじめ自分自身を、また私たちの隣人を、つまりすべての人々を愛することを、私たちから最も切に求めておられるのです。なぜなら、神は人間を愛によつて、愛に向けて創造してくださいましたので、私たちは愛に生きるときだけ人間らしく生きますし、私たちの愛が完成されるときだけ、私たちは完全に幸せになるからです。

イエスは、苦しみや死から自分を守るという私たちの権利を否定していません。それは、誰も私たちから奪つてはいけない権利であるだけではなく、私たちの義務でもあります。けれども、自分自身に対する最も重要な義務というのは、自分の愛を守ることなのです。人生において愛だけが絶対的なものでありますので、神から頂いた愛を保つために苦しみを受けなければならないときにも、さらに、自分の命をささげなければならないときにも、愛を守らなければならないのです。ですから、私たちが愛を選ぶか、自分の都合や快樂、自分の野心を実現することや欲望を満たすこと、さらに自分の命を

選ぶか、というような選択に直面することがあれば、必ず愛を選ばなければならぬのです。言い換えれば、イエスが教えているのは、私たちが人生の最終的な目的を辿つて、完全な人間、つまり創造主である神が求めておられるような人間になつて、神ご自身の命と幸福にあずかりたいと思うのならば、苦しみを避けることとか楽しみを増やすことではなく、愛を自分のすべての選択や決断の基準にして、この愛に苦しみや悲しみが伴うのか、楽しみや喜びが伴うのかには関係なく、いつも愛を選ばなければならないということなのです。

イエスが自分を苦しみや死から守るよりも、愛を優先するように教えることができたのは、父である神があらゆる苦しみや悪よりも、さらに死よりも力強い方であり、あらゆる悪や苦しみを善に変える力をもつておられる方であると信じたからです。イエスがこの確信は事実であるということを、ご自分の受難、死と復活によつて示してくださいました。神の力と神の忠実さを現すイエスの復活を信じることは、さらに、ご自分を信じてご自分に命をゆだねる人を、必ず復活させるというイエスの約束がもたらす希望は、私たちが必要に応じて苦しみを受け入れたり、命をささげたりすることによつて、

最後まで愛に留まるために必要な力の源となるものなのです。

21世紀に生きている私たちも、このようなあらゆる悪や苦しみ、また死よりも強い神の力を体験することができます。そのためには、神に信頼し、イエスの教えや模範に従つて生き、与えられた使命を果たそうとすることによって、神に自分の命をゆだねるだけで十分なのです。